三重県埋蔵文化財調査報告　17

多気郡明和町

古里遺跡発掘調査報告

――C　地　区――

1973

三重県教育委員会

序

この数年来、急激な開発事業による埋蔵文化財保存への影響は、日ましに敷化している。そのため、開発事業関係者はもとより、広く県民各位の文化財保護への理解と協力を強くもとめているところである。

ここに報告する多気郡明和町所在古里遺跡も、民間企業による団地計画地となり、その保全が大きな問題となっている。これまでの調査により、遺跡の東側にある斎王宮跡とともに、その重要性が次第に明らかにされてきた。

今回の調査は、この遺跡の重要性により、国庫補助金の交付をうけて、実施したものであるが、なお不明な点も多く、さらにこの遺跡の性格を明らかにするため、調査を継続して行なう予定である。

報告書の刊行にあたり、この調査に協力された明和町教育委員会をはじめ、地元関係各位に謝意を表する。

昭和48年3月

三重県教育委員会

教育長　関　根　則　之

例　　言

1．本書は、三重県が国庫補助金の交付をうけて、三重県教育委員会が調査主体となって実施した、多気郡明和町大字竹川・古里遺跡Ｃ地区の発掘調査の結果をまとめたものである。

2．発掘調査は、三重県教育委員会文化課技師山沢義貴が担当者となり、同文化課嘱託中森成行がくわわった。出土品整理、報告書作成は上記の者のほか同文化課小玉道明、下村登良男、谷本鋭次、伊藤久嗣、吉村利男、吉水康夫が参加した。

3．本報告書に使用した図版18の遺跡空中写真は中日新聞社の提供による。

4．本書の遺構標示は下記の略記号による。

ＳＢ；竪穴住居址、掘立柱建物址

ＳＤ；溝　　址

ＳＥ；井　　戸

ＳＫ；土　　坑

ＳＸ；方形周溝、墳墓等

5.　スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ　前　言 …… 1

1　調査に至る経過 …… 1

2　調査の方法 …… 2

Ⅱ　位　置 …… 3

Ⅲ　遺　構 …… 4

1　弥生時代中期の遺構 …… 4

2　古墳時代後期の遺構 …… 5

3　飛鳥・奈良時代の遺構 …… 7

4　平安時代前期の遺構 …… 11

5　鎌倉時代前期の遺構 …… 11

6　鎌倉時代後期の遺構 …… 12

Ⅳ　遺　物 …… 14

1　弥生時代の土器 …… 14

2　古墳時代後期の土器・埴輪 …… 16

3　飛鳥・奈良時代の土器・土製品 …… 18

4　平安時代前期の土器 …… 23

5　鎌倉時代前期の土器 …… 23

6　鎌倉時代後期の土器 …… 25

Ⅴ　結　語 …… 28

図　版　目　次

ＰＬ１　古里遺跡位置図、地形図
ＰＬ２　古里遺跡発掘区配置図
ＰＬ３　Ｃ地区遺構配置図
ＰＬ４　Ｃ地区平面図
ＰＬ５　住居址、土坑実測図
ＰＬ６　住居址実測図
ＰＬ７　住居址、土坑、大溝実測図
ＰＬ８　弥生時代土器
ＰＬ９　弥生時代土器拓影
ＰＬ10　弥生時代土器拓影、古墳時代土器
ＰＬ11　古墳時代土器、飛鳥奈良時代土器
ＰＬ12　飛鳥奈良時代土器
ＰＬ13　飛鳥奈良時代土器
ＰＬ14　飛鳥奈良時代土器、平安時代土器、鎌倉時代土器
ＰＬ15　鎌倉時代土器
ＰＬ16　鎌倉時代土器
ＰＬ17　鎌倉時代土器、室町時代土器
ＰＬ18　遺跡全景
ＰＬ19　Ｃ地区全景
ＰＬ20　ＳＢ１・ＳＢ20・ＳＢ21・ＳＢ22・ＳＤ19、ＳＫ33・ＳＢ30
ＰＬ21　ＳＢ35・ＳＢ36・ＳＢ37、ＳＢ39・ＳＤ40・ＳＢ36・ＳＢ37
ＰＬ22　ＳＢ41、ＳＢ57・ＳＸ58・ＳＤ50
ＰＬ23　弥生時代土器
ＰＬ24　弥生時代土器、古墳時代土器
ＰＬ25　古墳時代土器、飛鳥奈良時代土器
ＰＬ26　飛鳥奈良時代遺物
ＰＬ27　飛鳥奈良時代土器、平安時代土器、鎌倉時代土器
ＰＬ28　鎌倉時代土器
ＰＬ29　鎌倉時代土器
ＰＬ30　鎌倉時代土器

表　目　次

第１表　方形周溝址の規模
第２表　飛鳥時代竪穴住居址の規模
第３表　掘立柱建物址の規模
第４表　弥生時代遺構別実測土器

Ⅰ 前　　言

多気郡明和町大字竹川所在の古里遺跡が問題にされてから、すでに３年有余を経ている。調査が重ねられるにつれて、この遺跡が10万m²以上の範囲の想定されること、東隣の古代中世の斎王宮跡にも何らかの深いつながりをもつことなど、重要な意味がかんがえられてきた。

1　調査に至る経過

古里遺跡がはじめて注目されたのは、昭和44年10月、三交不動産株式会社から明和町大字竹川字古里、同中垣内地内の団地造成にかかる埋蔵文化財の所在の有無、およびその処置についての、三重県教育委員会への文書照会による。

当時、『全国遺跡地図―三重県』（文化財保護委員会　昭和41）には、塚山１号墳・同２号墳が記載され、これについては、事業地からの除外、あるいは緑地としての事業地内保存が計画されていた。しかし、未確認遺跡の所在も考えられ、遺跡分布調査を実施することとなった。踏査の結果、事業計画地の西南部及びその周辺に、土器片の散布が確認され、当地の小字名をとって「古里遺跡」と呼称した。この結果をもとに、町教育委員会もふくめて、三者により度々協議を重ね、遺跡の範囲、状況把握のため、試掘調査の実施をきめた。

試掘調査は、昭和45年６月～７月、明和町教育委員会が主体となり、県教育委員会から主事を派遣し現場作業を担当し、その経費は会社側の負担として行なった。この試掘調査により奈良時代及び室町時代の土器片が大量に出土し、建物の柱穴・大溝址などが検出され、古代・中世の村落址であることが推定された。そのため、本調査が必要となり、会社側の強い要請もあって、昭和46年10月から、南半分１万m²を対象に実施することになった。

発掘調査は、三者協議の上、県教育委員会と三交不動産株式会社の間で、調査の委託契約をとりかわし、着手した。調査は、団地計画地の南東部―Ａ地区（約1,200m²）、中央部―Ｂ地区（約5,000m²）について行なった。調査がすすむにつれ、土馬、蹄脚硯の破片、あるいは遺跡を横断する大溝址など、一般の集落址にはみられない遺物、遺構が明らかにされ、さらには、この遺跡の東方約500ｍの斎王宮跡との関連など、にわかに注目されてきた。とともに、遺跡が事業計画地全域にひろがることも判明してきた。

遺跡保存問題も、こうした状況をもとに、同年12月頃から浮かび上ってきた。昭和47年１月には、三重県文化財を守る会(会長　三重県文化財専門委員　服部貞蔵氏）は、知事に対し、①団地造成地内の全面調査　②斎宮との関連の調査　③調査結果にもとづく遺跡保全計画などの実施を

陳情し、その保護を強く訴えた。ついで同年２月には、「古里遺跡を守る連絡協議会」が組織され、地元、明和町内においても、「明和町郷土文化を守る会」（会長世古口民三氏）が結成され、度々、遺跡見学会がひらかれ、保存の声の輪がひろげられた。

三重県教育委員会としては、このＡ地区、Ｂ地区調査の結果を検討するとともに、さらに調査の継続を計画し、文化庁記念物課をはじめ三交不動産株式会社、明和町教育委員会とも協議し、国庫補助金の交付をうけて、第３次調査の実施をきめた。

第３次調査は、昭和47年５月～９月、Ｂ地区を横断する大溝址の延長部の追求を主眼に、Ｂ地区の東にＣ地区(約3,000㎡)を設定しておこなった。また、斎王宮との関連については、別に「風土記の丘、史跡公園建設調査」の一環として、とくに古文献から斎王宮の調査を、京都大学工学部・修景計画研究会三重作業グループ（代表　福山敏男氏）に委託しておこなうことにした。

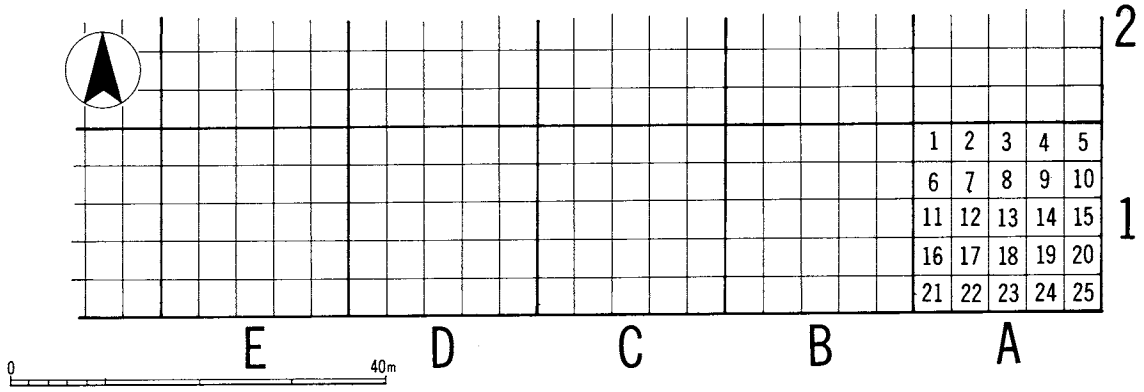
なお、今回の調査にあたっては、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長・坪井清足氏、三重大学教授・服部貞蔵氏、名古屋大学考古学研究室助教授・楢崎彰一氏の各位のご指導をはじめ、とくに明和町教育委員会・青木進氏、また、中川栄之助氏をはじめ地元斎宮地区の各位、斎宮小学校の諸氏のご協力をうけた。謝意を表するものである。

2　調査の方法

Ｃ地区は、団地造成計画地の中央部東側の約3,000㎡で、地籍は多気郡明和町大字竹川字古里にあたる。すでに調査したＡ地区は南側140ｍに、Ｂ地区は西隣30ｍにある。

この遺跡は、遺物の散布範囲として数万㎡をこえる広大なものであり、調査が長期に、しかも数次に分れて実施されることを考慮し、遺構、遺物の発掘作業中、および事後の整理上、標示の統一が要求される。

遺構標示は例言に記した通りであるが、発掘区画はアルファベットとアラビア数字で区分した。区画の方向は磁北を基準に、大地区を20ｍ四方として、東を起点に西にむかってアルファベットを南から北へアラビア数字を与えた。小区画は４ｍ四方とし、この大地区を25区画し、北西隅から東へ順おくりにアラビア数字をあたえた。



II 位　　置

古里遺跡は、南伊勢を流れる櫛田川と宮川の間にひろがる段丘の一つ、斎宮段丘の中央部西縁にある。行政的には、多気郡明和町大字竹川字古里・字中垣内に属している。

遺跡面はほぼ平坦で標高約12.5m、西側の祓川の沖積地との比高は約3mである。このあたりは昭和43年、民間不動産業者により団地予定地として買収されるまで、長く畑地として利用されてきた。現在は、一面の荒野となっている。

斎宮段丘上の各所には、古里遺跡と同様、広大な遺跡がいくつかある。南西1kmの金剛坂遺跡東方500mの斎王宮推定地、北東1.6kmの一ノ起戸遺跡、南方800mの露起遺跡などがそれである。この他古墳、古墳群も多く、遺跡の東隣には塚山古墳群（全12基）、北東1.3kmの坂本古墳群（全6基）などがある。これらのうちでも、とくに問題になるのは、斎王宮跡で、宮域としては、小字名、地割等により一応、範囲が推定されているが、これを中心とした遺物散布地は、西側で、古里遺跡に接し、東西600m、南北1kmの範囲があり、両遺跡の関連が問題となっている。

III 遺　　構

今回の調査により明らかにされた遺構は、弥生時代中期から鎌倉時代後期の各時期、各種のものがある。これらは調査地区全域に分布するが、東半部にほとんどが集中している。調査地区はほとんど平坦であるが、南西端にやや高く、北東端にむかってわずかに傾斜している。

層位は、20cm前後の表土（耕作土）、遺物を包含する10cm～30cmの黒褐色土層、そして茶褐色粘質土の地山面とつづく。地山面はほぼ全域にわたり粘土層がひろがるが、発掘区の西半でも北側では、砂礫層が露出している。

1　弥生時代中期の遺構

発掘区の北東部に、竪穴住居、土坑、溝址が点在している。弥生時代の出土遺物としては、前期の土器が数点あるが、遺構はこの中期のものにとどまる。

(1) 竪穴住居址

発掘区の北東隅において１棟が検出されている。

ＳＢ１　中央部を飛鳥時代のＳＢ20住居により掘り下げられている。東辺は発掘区外で未掘。平面は円形で、掘り方は５cm～10cmと浅い。周溝は巾20cm、深さ５cmで、北東側に一部みとめられた。柱穴、炉址は不明。出土遺物は、数10片の土器片にとどまる。

(2) 溝　　址

同時代のＳＫ38土坑の西半をとりまくように２条の小さな溝がある。

ＳＤ39・40　ＳＫ38土坑に対して弧をなし、いずれも巾40cm、深さ10cm前後と浅い。土器片が少量出土している。

(3) 土　　坑

発掘区の北東隅、中央部北寄り、東隅に点在している。全体に小形のものがおおい。少量の土器片がうまっていた。

ＳＫ２　発掘区の北東隅にあり、西辺は飛鳥時代のＳＫ３土坑と重複する。径1.2m×1.8m、深さ40cmで、北西側がもっとも深い。北東―南西にながく、平面が長方形にちかい。

ＳＫ12・13・76　発掘区の北西隅にほとんど接してつくられた径１m×70cm前後、深さ10cm～

20cmの平面不整形のものである。

ＳＫ16　古墳時代後期のＳＸ６方形周溝の東隅にある。径1.5ｍ×２ｍ、深さ50cmの平面楕円形にちかい。

ＳＫ38　発掘区の中央部北寄りにある。径1.5ｍ×2.5ｍ、深さ25cmでほぼ東西にながい。北側のＳＤ39溝との間にもややこれより小形の土坑がある。同時代のＳＤ39・40溝により囲まれた格好となっている。

ＳＫ54　発掘区の東隅にある。北辺は鎌倉時代のＳＤ50大溝により削平されている。径2.5ｍ×３ｍ、深さ15cm～20cmの平面が方形にちかいもの。底面は広くほぼ平坦である。

2　古墳時代後期の遺構

発掘区の中央部の大小の方形周溝址と、大形古墳の痕跡と推定されるものなどがある。住居址等は検出されなかった。

(1)　溝　　址

発掘区の南西部において、ＳＸ69の北東側を┐字状にめぐるＳＤ65溝址が１ヶ所検出されたにとどまる。

ＳＤ65　巾７ｍ～10ｍ、深さは北部で約90cm、南へ向ってしだいに浅くなっているもの。南端は鎌倉時代のＳＤ50大溝により切られている。溝内は黒褐色土がうまっていて、多数の円筒埴輪片・少量の須恵器・土師器が出土している。また、埋土の比較的上方から奈良時代の円面硯・土馬・カマド・土師器：須恵器等が出土している。奈良時代の遺構の重複が考えられるが不明。

(2)　土　　坑

発掘区の西部において大形のものが１基ある。その位置から南側の同時代のＳＤ65溝の延長部にあたるものかもしれない。

ＳＫ52　東西９ｍ、南北５ｍ、深さ1.5ｍの平面不整形のもの。南辺は、鎌倉時代のＳＤ50大溝で掘りぬかれて、東端には同じくＳＥ53井戸により掘りぬかれている。各種の須恵器、土師器が出土している。

(3)　方形周溝址

発掘区の各所に大小のもの６基がある。周溝の内側は全く削平されたのか盛土はみとめられず、その上、鎌倉時代の溝などによってかなり掘りぬかれている。対角線が四方位にのるものが４基

あり、他はほぼ北東―南西、北西―南東方向にのっている。溝内は黒褐色土でうまり、この時期の土器片のほか、奈良時代、鎌倉時代の土器も混在している。

ＳＸ６　同じＳＸ10方形周溝の外側を囲むように重複している。南西辺は、検出されていない。溝内からは、少量の土師器片、須恵器片が出土している。

ＳＸ10　南西辺は、後世の土坑により、掘りぬかれているが、全体としてよくみとめられる。東隅と西隅が、１ｍ前後ほど溝がとぎれている。北隅では、須恵器・杯の身に蓋がかぶさったものが２組、土師器・椀１個がおかれていた。

ＳＸ42　南隅は鎌倉時代のＳＤ50大溝で削平されている。北西辺は奈良時代のＳＤ51溝、鎌倉時代ＳＤ45溝に掘りぬかれ、形状は明確でない。また東隅は奈良時代の径 2.5ｍ深さ30cm～60cmほどの土坑と重複し、溝内においてとくにその時期の土器片が多く混在していた。南東辺中央では、須恵器・杯・瑞・甕、土師器・椀・甕などが比較的まとまって出土している。

ＳＸ58　北半は鎌倉時代のＳＤ50大溝などにより、東隅はＳＥ70井戸により掘りぬかれている。南東辺から須恵器・壺、南隅から土師器・壺が出土している。

ＳＸ62　中央を鎌倉時代のＳＤ63・64溝により掘りぬかれている。南東辺は未掘。溝内の遺物は少ない。

ＳＸ69　発掘区の南西隅で、ＳＤ65溝などに囲まれた東西25ｍ、南北17ｍの平坦面である。南側は調査地外へおよび、北では鎌倉時代のＳＤ50大溝により切られているが、平面は方形にちかい。中央部には浅い土坑や小溝がみとめられたが、ほとんど遺物はみられず、後世の耕作によるものであろう。この平坦面をめぐる北東側のＳＤ65溝内には多数の円筒埴輪片と少量の須恵器・土師器がうまっていたことから、この平坦面は、大形の古墳が削平された痕跡と考えられる。

ＳＸ	規　　模(ｍ)	巾　(ｍ)	深　　さ(cm)	長　　軸
6	16.5× —	2.5～3.0	30～50	N 50° E
42	18.0×(18.0)	2.0～3.0	25～35	N 37° E
10	10.0× 9.6	1.0	20	N 57° E
58	10.5× 9.7	1.0	20～30	N 50° E
62	10.7×(10.5)	1.0～1.3	25	N 16° E
69	25 × —			
ＳＤ65		7	80～90	(N 40° E)

第１表　方形周溝址の規模　(　)は推定

3　飛鳥・奈良時代の遺構

発掘区のうちでも東半に集中してみとめられた。竪穴住居址・掘立柱建物址・大小の溝址・土坑などがある。このうち掘立柱建物址・土坑は、出土遺物が少量で、時期の断定しがたいものもいくつかある。

(1) 竪穴住居址

発掘区の東半中央に８棟がある。平面の面積27m²以下の小形のもので、方形ないし長方形に近いが不整形なものが多い。後世の遺構と重複あるいは削平されていて、全体の形状が明確でないものがある。竪穴内の床面には径20cm前後、深さ25cm前後の小穴もいくつかみられるが建物にともなう柱穴かどうかは不明。

ＳＢ20　弥生時代中期のＳＢ１住居内に全く重複している。平面方形のもっとも小形のもの。竪穴内には少量の土師器片がうまっていた。

ＳＢ25　床面の北隅は鎌倉時代のＳＤ18溝により削平され、床面は凹凸が多い。北東辺中央より東寄りには、かまど址とおもわれる径40cm×50cmの焼土面がある。竪穴としては他のものに比べかなり深いが、少量の須恵器・土師器片がうまっていたにとどまる。

ＳＢ26　平面が方形に近いもので、中央を鎌倉時代のＳＤ19溝により南北に掘りぬかれている。北辺の掘り方はほとんど削平され、南辺は後世の小土坑によって削平されている。かまど址は不明。出土遺物は少ない。

ＳＢ30　平面がほぼ南北に長いが、東辺が４ｍ、西辺が 4.8ｍの不整形なものである。南東隅では、同時代のＳＢ34住居と接している。東辺の南東隅近くに径60cm×70cmのかまど址とおもわれる焼土面がある。竪穴内には、比較的多くの土器片がうまっていた。

ＳＢ34　北隅は同時代のＳＫ33土坑、東辺は同じく径１ｍ前後、深さ30cmほどの小形の土坑により掘りぬかれている。竪穴の掘り方としては北西辺と南西辺の一部の検出にとどまる。床面の中央より西寄りに 200cm²ほどの焼土面が２ヶ所あるが、かまど址は不明。出土遺物はきわめて少ない。

ＳＢ48　同時代のＳＢ20住居とＳＢ26住居との間にある。西隅は後世の径２ｍ前後、深さ20cmほどの浅い土坑により掘りぬかれ、南東隅は未掘。また床面の中央は径１ｍ、深さ30cmの土坑が掘りこまれている。かまど址は不明。出土遺物も少ない。

ＳＢ59　ＳＢ20住居と同様、面積10m²以下の小形のものであるが、北東辺の中央にかまど址がある。東隅は同時代の巾1.5ｍ、長さ7.5ｍ、深さ30cmの浅い溝状の土坑と重複している。かまど址は70cm×120cmの焼土面としてみとめられた。竪穴内には各種の土師器が比較的多くうまっていた。

ＳＢ60　床面の中央を北西―南東に、鎌倉時代のＳＤ43溝の南東端の延長にあたると思われる

巾40cm、深さ20cmほどの細い溝で一部掘りぬかれている。ほぼ南北に長いものであるが、東辺は４ｍ、西辺は 4.8ｍで、ＳＢ30住居と同様、不整形。かまど址は東辺中央近くの径40cmほどの焼土面とおもわれる。また床面中央には１ｍ四方の焼土面がある。出土遺物としては、各種の須恵器・土師器などがある。

ＳＢ	規　　模(ｍ)	深さ(cm)	長　　軸	かまど位置
20	2.9×2.8	30	N 13° E	—
25	5.4×5.0	50	N 45° W	北東辺中央
26	5.0×4.8	20	N 11° E	—
30	4.8×4.0	20	N 15° E	東辺南寄り
34	—	10	(N 40° E)	焼土面あり
48	4.8×4.5	20	N 14° W	—
59	3.3×2.8	15	N 40° E	北東辺中央
60	4.7×3.6	25	N 15° W	東辺中央

第２表　飛鳥時代竪穴住居址の規模　(　) は推定

(2) 掘立柱建物址

掘立柱建物址は、発掘区の東半から10棟が検出されている。そのうちでも北西側に３間×３間の倉庫と考えられるもの、南東側には北東―南西方向の棟の長方形の廂付で規模の大きいものがならび、形状によるまとまりを示している。この他、発掘区全域に柱穴状の小穴が多数みとめられたが、建物としての配置はみとめられなかった。

ＳＢ21　発掘区でももっとも北東隅に検出されたもの。建物の南東隅では、ＳＢ22掘立柱建物と重複しているが、前後関係は不明。２間×２間の身舎に、南、東の２方に廂をもつ。身舎と廂の柱間は、桁行、梁行のそれぞれにおいて等間。身舎の柱掘方は径50cm～60cmの方形に近く、深さは40cm～50cm。廂の柱掘方はそれより、やや小さい。

ＳＢ22　検出された建物址のうちでは、もっとも小形のものである。２間×２間のものであるが、わずかに南北に長い。柱掘方は径50cm～60cm、深さは25cm～50cmで、柱間、柱通りともに不ぞろいである。棟の方向からみて、南側に接してみられるＳＢ23掘立柱建物の附属的なものとも思われる。

ＳＢ23　検出された建物址のうちで、もっとも大形の東面廂付建物。南東隅では、ＳＢ26・48竪穴住居と重複している。身舎は２間×４間で、柱間のうち梁行が桁行よりわずかに広い。柱掘方は径50cm×70cm前後、深さ40cm～50cmの長方形のものがおおい。廂は柱間のうち梁行が身舎よりわずかにせまく、柱掘方も径40cm前後、深さ50cm前後とやや小さい。

ＳＢ41　東面廂付建物。身舎、廂ともに桁行の柱間が等間ではなく、2.3+2.0+2.3(ｍ）と中央が、両端よりせまい。身舎は２間×３間で柱掘方は径60cm～70cm、深さ40cm～60cmの方形ないしは円形である。廂は柱掘方が径30cm前後、深さ20cm前後で浅い。

ＳＢ57　東面廂付建物。北半が鎌倉時代のＳＤ50溝により削平されていて、全体の規模は不明。桁行は他の建物から類推して、３間あるいは４間のものであろう。身舎は柱掘方が径60cm～70cm、深さ20cm～40cmで、平面不整形のものがおおい。廂は柱掘方が径20cm、深さ20cmの浅いもので、しかも弥生時代のＳＫ54土坑などと重複していて明確でない。

ＳＢ75　南半が鎌倉時代のＳＤ18溝などにより削平されていて、全体の規模は不明。桁行が３間あるいは４間のものであろう。廂はもたない。検出された北半も柱間が不ぞろいであるが、梁行柱間が桁行柱間よりもかなり広い。柱掘方は径50cm前後、深さ40cm前後。

ＳＢ35　北側柱列が、鎌倉時代のＳＤ18溝等により削平されたためか、３間×２間ほどの建物址として検出されている。しかし、床束をともなうこと、南側のＳＢ36・37などの３間×３間の掘立柱建物と柱通りがほとんど一線上になることから、３間×３間の建物と思われる。柱掘方は径35cm～70cm、深さ10cm～30cmで大きさが不そろいである。

ＳＢ36　北東側には側柱心々距離で 2.6ｍ前後はなれてＳＢ35建物、南西側には同じく側柱心々距離で 3.3ｍ前後はなれてＳＢ37建物があり、ほぼ北東―南西にならぶ建物群の中央のもの。３間×３間の建物であるがわずかに南北に長い。柱掘方は径50cm～70cm、深さ30cm～40cmの平面方形にちかい。床束をもち、その柱掘方の大きさもほぼ同じである。

ＳＢ	規模（間）	桁行（ｍ）	梁行（ｍ）	棟方向	柱間寸法(ｍ)			備考
					桁行	梁行	廂梁行	
21	３×３	7.0	6.0	N20°E	2.3	2.0	2.0	南、東廂付建物
23	４×３	8.6	7.0	N24°E	2.15	2.55	2.3	東廂付建物
41	３×３	6.6	6.0	N20°E	2.3 2.0	2.1	1.8	〃
57	―×３	―	6.5	N20°E	2.0	2.3	1.9	〃
22	２×２	3.3	2.9	N18°E	1.65	1.45	―	床束
75	―×２	3.3	2.3	N20°E	1.65	1.15	―	
35	(3)×３	(4.8)	4.8	N35°E	1.6	1.6	―	(床束)
36	３×３	4.6	4.1	N33°E	1.53	1.36	―	床束
37	３×３	4.8	4.5	N33°E	1.6	1.5	―	〃
61	３×３	4.3	4.2	N28°E	1.46	1.4	―	〃

第３表　掘立柱建物址の規模（　）は推定

ＳＢ37　３間×３間の建物。北東側のＳＢ36建物と同様、南北がわずかに長い。南隅は鎌倉時代のＳＤ50溝により削平されている。柱掘方は径60cm～75cm、深さ30cm～50cm前後である。床束をもち、その柱掘方は径35cm～50cm、深さ20cm～40cmでやや小さい。

ＳＢ61　３間×３間の建物。ほとんど平面は方形にちかい。同じ形状のＳＢ36、37建物よりやや小形である。中央を鎌倉時代前半のＳＤ63溝により掘りぬかれている。柱掘方は径40cm～50cm、深さ30cm～40cmで、床束の柱掘方は径30cm前後、深さ20cm～30cmでやや小さい。

(3)　溝　　址

この時代の溝として検出されたものは少なく、発掘区の北西隅において東北東―西南西につづく２条と、西部に北東―南西につづく１条が判別された。

ＳＤ７・８　巾１ｍ前後、深さ20cmほどで、４ｍほどはなれて平行してつづくもの。このうちSD８溝の西辺は、鎌倉時代のＳＤ９溝により一部削平されている。

ＳＤ51　発掘区の西部において古墳時代後期のＳＸ42方形周溝址の北西側を一部削平している。巾２ｍ前後、長さ10ｍ以上のもの。

(4)　土　　坑

大小様々のものが多数ある。これらは発掘区でも竪穴住居と同様、ほとんどのものが東半にある。出土遺物は、須恵器、土師器が多く出土した。

ＳＫ３・４・５　発掘区の北東隅において重複したもの。中央には鎌倉時代のＳＸ71集石遺構が上につくられている。ＳＫ３土坑は径３ｍ×４ｍ深さ20ｍ、ＳＫ４土坑はもっとも大形で、径4.5ｍ×6.5ｍ、深さ15cm、ＳＫ５土坑は径４ｍ、深さ20cmほどでいずれも浅く底面は広く平坦である。多数の土師器、須恵器が出土した。

ＳＫ15　発掘区の北西隅にあり、中央を鎌倉時代のＳＤ18溝により、深く掘りぬかれている。径3.5ｍ×４ｍ、深さ15cmの平面が方形にちかい浅いもの。

ＳＫ17　ＳＢ75掘立柱建物と全く重複している。径２ｍ×2.8ｍ、深さ50cmほどの平面不整形なものである。

ＳＫ24　同時代のＳＢ25住居址の東側に接した径２ｍ×３ｍ、深さ10cmほどの平面不整形な浅いもの。北西側は鎌倉時代のＳＤ18溝の東端により掘りぬかれている。

ＳＫ27　発掘区の北東隅の径２ｍ×2.5ｍ、深さ20cmほどの浅い平面楕円形にちかいもの。南側には、同時代の径１ｍ×２ｍ、深さは中央で20cm、両端で50cm、南東側に径2.7ｍ×1.5ｍ以上、深さ45cmほどの底面の平坦なものがある。

ＳＫ33　同時代のＳＢ34住居と重複した径３ｍ×4.3ｍ、深さ40cmの平面楕円形に近いもの。底面は広く平坦である。北側には、同じく径２ｍ～３ｍ、深さ30cm～50cmの土坑が２基東西に接している。また南東側には径１ｍ前後、深さ30cmほどの小形のものが２基連なっている。

ＳＫ55　発掘区の南東隅にある径２ｍ、深さ20cmほどの浅いもの。平面は不整形で、底面は凹凸がひどい。南辺は未掘である。

ＳＫ56　古墳時代後期のＳＸ62方形周溝の北東角を掘りぬいてつくられた径2.5ｍ×３ｍ、深さ40cmのもの。中央は鎌倉時代のＳＤ19溝によって削平されている。

4　平安時代前期の遺構

この時期のものと判別できた遺構は、遺物とともに少なく、発掘区の東部のＳＢ41掘立柱建物に重複するか接した土坑２基だけである。

ＳＫ31　ＳＢ41建物址と重複した１ｍ×1.5ｍ、深さ20cmの小形の浅いもの。

ＳＫ32　鎌倉時代のＳＸ46土坑墓によって南辺が削平されている。径２ｍ、深さ20cmの平面方形にちかく浅いもの。

5　鎌倉時代前期の遺構

大溝址･井戸址･土坑などがある。これらのうち大溝をのぞけば、発掘区の各所に散在した格好となっている。

(1)　溝　　址

ＳＤ50　発掘区の中央を東西に横断する大溝で、全長70ｍほどを検出した。その平面は、東半部ではほぼ直線状であるが、西側では、ＳＸ69古墳をさけた格好で西北西に曲っている。この大溝は西隣のＢ地区でも検出されており、その総延長は202ｍに達する。西半については、掘り方上方約１ｍほどの掘り上げにとどめ、底面まで完掘していない。完掘した東半では巾３ｍ～４ｍ、深さ2.4ｍ～2.7ｍで、断面がほぼ逆台形をなし、地山の礫層を深く掘りぬいている。底面は溝の方向である東西に対してほとんど水平にちかい。溝内は砂礫を多量にふくんだ暗茶褐色、黒褐色の土が互層に埋まっていた。溝底には、全面に厚さ約30cmほどの褐色ないし黒褐色の粘土が埋まっていた。この粘土層からは、遺物は出土していない。

1.3ｍほどはなれて平行してつづき全体の巾は2ｍ前後となっている。この２条の溝にはさまれた中央は、深さ20cmほどで、底部には砂層が堆積している。２条の溝は、溝の側石などの施設の抜きとられた痕跡とも思われるものである。

ＳＤ63　古墳時代後期のＳＸ62方形周溝の中央を、南東から北西にむかい、ＳＤ50大溝に合流する溝。溝巾は現状でおよそ2.3ｍあるが、両側に巾70cm前後で溝底より約20cm深い側石を据付けたと思われる溝がある。したがって元の溝巾は約１ｍのものと考えられる。底面はわずかに北北東に傾斜している。溝の深さは30cm～60cmである。

(2)　井　　戸

発掘区の西端、南東端の２ヶ所にある。いずれも素掘りのもののようである。礫層に掘りぬかれていてＢ地区の発掘による同様の井戸の所見から、崩落の危険性もあり、現地表下1.5ｍ～2ｍまで掘るにとどめた。

ＳＥ53　古墳時代後期の大形のＳＫ52土坑の東端につくられたもの。径1.2ｍほどのものである。

ＳＥ70　古墳時代後期のＳＸ58方形周溝の東端に掘りぬかれたもの。径1.5ｍ×1.7ｍ。

(3)　土　　坑

鎌倉期の土坑は発掘区の各所において多数検出されているが、この時期のものと判別できたものは、１基にとどまる。

ＳＫ73　発掘区の北東部にあり、奈良時代のＳＢ21掘立柱建物址の東を掘りぬいている。径1.4ｍ×1.6ｍ、深さ30cmほどの浅いもの。少量の山茶椀片が出土している。

6　鎌倉時代後期の遺構

発掘区の全域にわたり、もっとも多く検出されている。溝址、土坑、土坑墓、集石遺構があるが、建物址は検出できなかった。

(1)　溝　　址

発掘区の各所から大小の溝址が検出されている。その平面の方向は、ほぼ北東―南西、北西―南東につづき、数ｍの間隔で２条が平行しているものもおおい。

ＳＤ９　発掘区の北西隅において、東北東―西南西につづき、北半では奈良時代のＳＤ８溝址を掘りぬいている。巾１ｍ、深さ20cm～40cmで、底面はわずかに南西から北東へ傾斜している。

ＳＤ11・14　西端で同時代のＳＤ９溝と交叉し、ほぼ東西に約７ｍの間隔で平行してつづく。２条とも巾50cm前後、深さ30cm前後。ＳＤ11溝は東端で北へ曲り、奈良時代のＳＫ４土坑と重複している。ＳＤ14は、10ｍほど検出されている。

ＳＤ18　ＳＤ11溝と溝の中心距離で8.5ｍ前後南にはなれて平行してつづく。東端は同時代の

規模のＳＤ19溝まで３ｍほどでとぎれる。巾1.4ｍ前後、深さ55cm前後。底面はほとんど水平。

ＳＤ19 発掘区の東端を北北東―南南西に長くつづき、中央では鎌倉時代前期のＳＤ50大溝址を掘りぬき、その埋土の切り合いも明確にみとめられている。北端の東西両側外には巾約１ｍ前後・深さ20cmの溝と重複している。底面はわずかに北北東に傾斜している。巾１ｍ、深さ30cm～60cm。

ＳＤ45 発掘区の西部において古墳時代後期のＳＸ42方形周溝址の北西辺を掘りぬいている。南端はＳＤ50大溝址でとまっている。巾１ｍ、深さ30cm前後。

ＳＤ43・44 古墳時代後期のＳＸ42方形周溝址の中央を南北に約４ｍ間隔で平行してつづくもの。このうちＳＤ43溝は南端で南東に曲る。２条とも巾50cm前後、深さ20cm～30cm前後。

ＳＤ64 ＳＤ63溝から心々距離で約４ｍ南に平行して、巾１ｍ前後、深さ50cm前後で、西端は南西へ直角に曲っている。

(2) 土　　坑

発掘区の北西部に大小のものがまとまっている。大形のものとしては、古墳時代後期のＳＫ52土坑の西隣の3.5ｍ×4.5ｍ、深さ50cm、小形のものは、方1.5ｍ前後、深さ30cmである。この小形のもののうちには、径10cm×20cm大の円礫が数個うまっていたものもある。

(3) 土　坑　墓

発掘区の北東側に比較的まとまってみられる。平面が長方形の土坑で、ＳＸ28土坑墓から、人骨片などが出土していて、他のＳＸ46、47も形状が似ているため、土坑墓とした。

ＳＸ28 古墳時代後期のSX6方形周溝址の北東辺を掘りぬいている。径１ｍ×1.7ｍ、深さ50cmほどのほぼ南北に長い方形のもの。西と南には、Ｌ字状にＳＤ29溝がまわっている。溝内には、10cm×20cm大の礫が数個うまっていた。この小溝は土坑を方形にとりまくようにつくられたものと思われるが、北東側ではＳＸ６方形周溝址と重複していて、検出できなかった。

ＳＸ46 平安時代のＳＫ32土坑の南辺と切り合ってつくられたもの。径1.1ｍ×2.2ｍ、深さ30cmで、北東―南西に長い長方形のもの。

ＳＸ47 ＳＸ46土坑墓の南東側２ｍほどはなれた、径1.0ｍ×1.7ｍ、深さ30cmで、ほぼ同じ方向につくられている。

(4) 集　石　遺　構

発掘区の北東隅において２ヶ所が検出されている。いずれも掘り方をともなわず、地山面より15cm前後、黒褐色土の上にある。礫の集合でまとまった配置をしめさない。

ＳＸ71 1.0ｍ×3.2ｍの範囲に、径10cm大の礫を主とし、20cm×30cm大のものが数個ある。土師器・小皿、甕、山茶椀片などが少量出土している。

ＳＸ72 1.6ｍ×1.8ｍの範囲に、径10cm大の礫を主として、15cm×30cm大ほどのものが数10個まとまっている。山茶椀片が出土している。

Ⅳ 遺　　物

1　弥生時代の土器

弥生時代の土器は遺構にともなわない少量の前期土器のほかは中期の土器である。中期の土器は第4表に示したように遺構から出土しておりその量も比較的多い。時期的には中期の前半のものと中葉のものがある。

(1)　前期の土器（ＰＬ２―18～20・23）

壺形土器の胴部の破片が数点出土しているが遺構にともなうものはない。いずれも刻み目をほどこした貼り付け凸帯がめぐるもので、器表はヘラ磨きをしている。19の貼り付け凸帯下にはハケ目が残っている。器壁は厚く、胎土には砂粒を多く含む。茶褐色を呈する。弥生時代前期のなかでも「新」の段階にあたるものと思われる。

(2)　中期前半の土器（ＰＬ９―21・22・24～34・36・38・52）

口縁部が大きく外反する太頸の壺がある。いずれも頸部に巾広く櫛描横線文を施すが、端部が無文のもの（21・38）櫛描波状文のあるもの（22）がある。38の口縁端部はやや上に肥厚する。

頸部および体部の破片としては以下のものがある。24～26は刻み目をつけた細い凸帯と櫛描横線文を組み合せたもので、24では凸帯の下に鋸歯状の押圧痕がある。27・29・36は櫛描線文を施したもので、27では頸部文様帯の下端に鋸歯状圧痕がめぐる。文様帯間はヘラでよく磨いている。30・31は荒い波状文を描くもの。31ではその上下に沈線を入れている。32・33は沈線の間を縦の沈線でうめるもの。34は太いヘラ描沈線で弧状と直線を組み合せたものでよくヘラで磨いている。このほか体部全体に条痕をほどこしたもの（52）がある。

遺　構	遺　物　番　号	遺　構	遺　物　番　号
ＳＫ　16	1　27　29　33　47　52	ＳＢ　1	42　56　59　62　64　65　66
ＳＫ　12	32　48	ＳＫ　54	10　16　60　68
ＳＤ　39	40	ＳＫ　76	35
ＳＫ　38	6　7　13	ＳＫ　13	61
ＳＫ　78	3　4　12　30　58　73　74		

第４表　弥生時代遺構別実測土器

(3) 中期中葉の土器（ＰＬ８・９・10）

太頸壺（35・39・40）　太い沈線を多く用いる太頸壺で、39では口縁端部に刻み目、外面に櫛描横線とヘラ描沈線を入れている。40は内面にヘラ描沈線、外面にヘラ描直線と跳上文がみられる。35は頸部の破片で、器壁がわずかに屈曲する。上下に太い沈線を入れその間に横位のヘラ描羽状文をほどこしている。これらは三河地方に分布する瓜郷式に類似するものと思われる。

細頸壺Ａ（１・２・41～51・53～57）　やや外反する細長い口頸部から、下位で胴の張る体部、小さい平底につづく壺。１・41～44は口縁端部は無文で頸部には巾広く櫛描横線文をほどこす。このうち44の口縁部はやや内弯し、この頸部文様帯の下端にはヘラ描沈線が２条入る。45の口縁端には櫛描波状文がある。46と47は細頸壺でもやや口径の大きなもので、端部に刻み目、外面を波状文を描き、時期的に前半にさかのぼるものかもしれない。

体部の文様としては、櫛目文を主体として各種のバラエティーをもっている。しかし全体をうかがえるものは１と２だけにすぎない。胴部上半には間隔をおいて２条の櫛描横線文を施している。１の頸部に近い横線文には、縦方向の櫛目文を４ヶ所で重ねている。両者とも文様帯のほかはヘラ磨きしているが、１では地文のハケ目が残っている。このほか破片としては、櫛描横線文に各種の櫛描文を重ねている。それは鋸歯文を重ねるもの（49・50）縦方向の櫛目文（54）、ヘラ描直線文（54・59）を重ねるもの、波状文を重ねるもの（55・56・57）がある。また櫛描横線文と鋸歯状文（48）、斜格文を組み合せたもの（53）もある。このうち、51・54・57の文様帯の間はヘラで磨いている。

細頸壺Ｂ（37・58・60～71）外反する口縁部の上方が内弯し受口状を呈するもの。櫛描波状文、刻み目、櫛描横線文がほどこされる。口縁部が外反するＢよりも、時期のくだるものと思われる。体部の文様は、胴部の破片のみで完形品はないが、文様帯の上下をヘラ描沈線で区画するものをこの類とした。櫛描横線文を巾広くいれるもの（60）その上に縦方向の櫛描直線文（61・68）、波状文（62・64）を重ねるもの、波状文のみのもの（58）、櫛描横線文を波状文を組み合せたもの（62・64）がある。69・70・71は沈線と縄文を組んだもの。60は流水文、63は櫛描横線に孤状文を加えた凝流水文。この２例は前半にさかのぼるかもしれない。

甕（13～17・72～74）　いずれも外面は縦方向のハケ目調整。口縁端部は全周に刻み目を入れるもの（14・15）、３～４ヶ所に刻み目を入れるもの（13）がある。口縁部内面に横ハケ目を入れた外反度の強い15と16は前半にさかのぼるかもしれない。

中期の土器のなかでも前半のものには、大きく外反する太頸壺で太く荒い波状文や沈線を入れるもの、櫛目と刻み目凸帯を組んだものがあった。これらは東海地方で朝日式と呼ばれるものに相当する。[①] この時期の遺物を出す遺構としてはＳＫ16・ＳＫ12・ＳＤ39・ＳＫ78等である。

前半に較べると細頸壺の盛行する中葉の土器は多い。細頸壺のうち口縁部が受口状を呈するこ

こでBとしたものは、中期中葉の貝田町式の特徴をよくあらわしたものであり、体部の装飾に櫛目文の上下に沈線をほどこし磨消技法がよくみとめられる。一方Aとしたものは、外反する口縁部の形態や、文様を区画する沈線を入れず磨消技法もさして顕著ではないことから、Bよりも時期的にさかのぼるものと思われる。中期中葉に相当する遺構としてはＳＢ１・ＳＫ54・ＳＫ76・ＳＫ61等がある。

2　古墳時代後期の土器・埴輪

この期の遺物は溝址・土坑・方形周溝址等から出土している。

(1)　ＳＫ52出土土器（ＰＬ10—75～89）

大形不整形の土坑から、須恵器・杯・蓋・短頸壺・俵瓶、土師器・壺・甕が出土した。

須　恵　器

杯（75～79）　口径12cm～13cm、高さ4.5cm～５cm。やや内傾する長いたちあがりの端面は内傾する。底部はあまり丸味はなく受部近くまでヘラ削りしている。77・79は右まわりのロクロで削る。他は不明。

蓋（80～84）　口径14.3cm前後、高さ4.5cm～5.3cm。やや丸い天井部から、短い稜をへて下方にのびる口縁部にいたるもの。端面は内傾する面をつくる。天井部は稜から１cm前後上方を右まわりのロクロでヘラ削り。80は口径にくらべて器高の大きいもの。ヘラ削りの範囲もせまい。

短頸壺（85）　短い口縁部と肩の張る偏平な体部からなるもの。底はヘラ削り。

俵瓶（86）　外傾する口縁部の破片で、沈線が１本入る。飛鳥時代の土器かもしれない。

土　師　器

壺（87）　外傾する短い口縁部と上位で肩の張る丸底の体部からなる小形の壺。体部外面は上半を縦、下半を不定方向のハケ目をほどこす。内面下半はヘラ削り。

甕（88・89）　脚のないＡと脚の付くＢの２種類ある。Ａは口径16cm、高さ24cmで外反する短い口縁部と球状の体部からなる。口縁端部はやや上に肥厚する。内外ともなでて仕上げており削りはおこなっていない。外面の一部に煤が付く。Ｂは器高36cm。口縁部の形はＡに近いが、上位に張りのある長い胴に裾開きの脚がつくもの。外面は全面なで、内面下半はヘラ削りしている。Ａ・Ｂとも鈴鹿市伊奈富遺跡出土品に近い。

②

(2)　ＳＸ42出土土器（ＰＬ11—90～99）

各辺の周溝から多少の土器の出土をみたが、特に南東辺の中央に多い。

須　恵　器

杯（93・94）　やや内傾する長いたちあがりから比較的長い受部、丸い底部につづく。底部は広い範囲にヘラで削っている。ロクロの回転方向は右まわり。

甕（90）　外反したのちさらに屈折して外上方にのびる口縁部の破片。屈折部に凸帯をおき口縁部と頸部に櫛描波状文を描く。この時期の甕のなかでは小形のもので久居古窯出土品に近い。

壺（91）　外反する口縁部をもつ小形の壺。内外面ともハケ目調整をしているが、灰黒色を呈し焼成も良好で須恵質に焼成されている。

甕（92）　外反する口縁部は端部で肥厚し上下に断面三角形状を呈し、内面には凹部をつくる。口縁部外面はカキ目、体部外面は平行タタキ目の上に一部カキ目を施こす。内面は同心円文。

土　師　器

椀（97・98）　口径11.5cm前後、高さ4.2cm前後。内面と外面口縁部は横なで、底部下面はなでている。98の内面にはハケ目と思われる方射状の文様がある。

鉢（96）　外傾する短い口縁部をもつ鉢。口縁部はなで、底部は不定方向のなで。

甕（95・99）　外反する短い口縁部と丸い体部のＡと頸部のしまらない深鉢形に近いＢとがある。Ａの甕はＳＫ52出土の88と形態技法ともよく類似している。Ｂとした99は調整に内外ともハケ目を用いるが、体部外面にはその上に一部カキ目をほどこす。底部下面には平行タタキ目。

(3)　ＳＸ10出土土器（ＰＬ11—106～110）

図示した５点とも北隅の溝中に一ヶ所にまとまって出土した。

杯（107・109）　たちあがり、受部とも鋭く長い107と、やや短く鈍い109がある。それぞれ蓋の106・108と組む。107は比較的平らな底部を広い範囲に左まわりロクロで削る。109の削りの範囲はせまい。

蓋（106・108）　107と組む106は口縁端部・稜とも鋭い。天井部はほゞ平坦。左まわりのロクロで削る。109と組む108は技法は杯同様あまく、左まわりのロクロで削りその範囲も狭い。

(4)　ＳＸ58出土土器（ＰＬ11—104・105）

出土量は少い。図示できるのは須恵器壺と土師器壺の２点である。105は底部にタタキ目のある須恵器壺。104は体部外面をハケ目、内面の下半をヘラ削り、上半を指先でなであげた土師器壺。

(5)　ＳＫ65出土土器（ＰＬ11—100・101）

溝中より多くの埴輪片が出土したが、いずれも円筒埴輪である。最下段の凸帯から下は縦、上は横のハケ目をほどこす。透しは楕円形を呈する。土器類も少量出土するが、ＳＫ52出土土器に近い。

(6) 黒褐色土出土土器（ＰＬ11—102・103）

103の瓶は発掘区東北端で出土。波状文と刺突文で飾り、底部はタタキ目。102の土師器椀は器壁が厚い。全面をなでて調整している。

ＳＫ52・ＳＸ42・ＳＸ10出土土器の編年上の位置については、共通して存在する杯を主体にして検討を試みたが、出土土器の種類の少いこともあって正確を期しがたい。陶色古窯址群の編年と対比すればＳＫ 52がＴＫ 23型式、ＳＸ 42がＴＫ 23型式ないしＴＫ 47型式、ＳＸ 10についてはＳＫ 52に近い古いタイプもあるが、108・109からみてＭＴ 15型式にあたるものと考えられる。[③] したがって古墳時代の遺構は５世紀末から６世紀の初頭に位置づけられる。

3　飛鳥・奈良時代の土器・土製品

この時期の遺物は発掘区東半の竪穴住居址土坑等の遺構から比較的まとまって出土している。遺構単位の出土土器をみると、土師器の量が圧倒的に多く須恵器は少い。ここでも土師器は台地出土土器に一般的にみられるように保存状態は悪い。

(1) ＳＢ25出土土器（ＰＬ11—111～119）

須　恵　器

杯Ａ（112）　推定口径10.5cmの小形の杯で、器高の深いものか。底部にはヘラ切り痕が残る。

蓋（111）　宝珠つまみをもち内面にかえりのある蓋。天井部上面はヘラで削っている。

土　師　器

杯Ｂ（113）　口径18cmのやゝ内弯する口縁部に高台の付く杯。高台は欠落する。口縁部内面には方射状暗文があるが、底部内外面、口縁部外面は風化著しく技法不明。

皿（114）　口径22.5cm。底部下面はヘラ削りをしているらしい。

鍋（117）　外反する口縁部と体部の境には沈線があり、その下は縦ハケ目。内面はなでている。

甕Ｂ（115・116）　外反する口縁部に長い胴のつく大形の甕。116の口縁部の外反度は強い。両者とも口縁端部はやゝ上方に肥厚し丸い。体部は内外ともハケ目仕上げ。胴下半は不明。

土錘（118・119）　長さ６cm、径１cmの紡錘形のもの。径0.3cmの穴が通る。５点出土した。

(2) ＳＤ65出土遺物（ＰＬ12—120～130）

巾７～10cmの溝中でも上部で多くを検出した。その種類は須恵器・杯・長頸壺・広口壺・円面硯・土師器・高杯・甕・カマド・土馬などである。溝出土品として一括図示したが、時期的なば

らつきもあり遺構の重複も考えられる。

須　恵　器

杯B（122）　器高の高い高台付の杯。底部はヘラ削り。7世紀代にさかのぼるかもしれない。

長頸壺（124）　肩に稜のある高台付の壺頸部は不明。底部はヘラ削りの後なでている。

広口壺（125）　肩に稜のある体部に太い大きく開く口縁部のつく壺。頸部には2条の沈線をめぐらす。124の長頸壺とこの広口壺は奈良時代の後半に下るかもしれない。

長頸瓶（123）　球形の小さな体部にラッパ状にひらく口頸部のつく瓶。頸部には沈線がはいる。

円面硯（126）　上面はほゞ平坦で陸と海をわける凸帯はない。脚部は欠くが、透しは巾の広いものと狭いものが交互に穿たれている。奈良時代の後半にくだるものと思われる。

土　師　器

高杯（127）　13面に面取りをした比較的短い脚をもつ高杯。杯部は不明。

甕B（128・129）　外反する口縁部をもつ長甕。128の口縁端部は上方に肥厚し、129は丸くおわる。体部は内外面ともハケ目をほどこしている。

カマド（130）　口縁部は内径およそ27cmあり、平担な面をつくる。把手はやや前よりに対にとりつける。外面は縦ハケ目、内面は横ハケ目。

土　馬（120・121）

2個体出土している。120は体長21.3cmあるが、四脚を欠いており高さは不明。尾の先端は欠けているが、短かく下にさがる。いわゆる飾馬で面繋、手綱、尻繋を沈線で、鞍は粘土ひもをはりつけて表現している。目、鼻孔、口はヘラ状の先端部をおしつけ、立髪は線刻によって表現している。他は指先でなでる。胴部は中空に作られており、尾の付け根に径0.7cmの穴があく。四脚の取り付けは胴部にヘラ先で線刻し粘土棒をはりつけている。

121は、頭部と尾の先端、腹部の一部を欠いており現存長15.6cm。鞍および尻繋の表現、体部の作りは120と同様であるが、鞍から尾の間の上面には線刻した弧状の文様がほどこされている。

以上のようにこの2個体の土馬は、立髪と馬具を表現し尾が下にさがる飾馬で、藤原宮出土例[④]に類似するところが多い。なお昨年度調査をしたB地区大溝からも飾馬が数個出土している。

(3)　SK3出土土器　（PL12—131～135）

須　恵　器

蓋（131・132）　偏平なつまみをもつ蓋で口縁端部は下方に折れる。天井部上面は131では右まわり、132では左まわりのロクロでヘラ削りしている。

土　師　器

皿（133・134）　口縁部内面には方射状暗文、底部上面周辺にはラセン状暗文がある。外面では口縁部が横なで、底はヘラ削りの後ヘラ磨き。

甕B（135）　口径21cm、高さ推定36cm。外反する口縁部の外側はややふくらむ。端部は上に肥厚し外側に面を作る。体部外面は縦ハケ目、内面上半は口縁端部まで横ハケ目。下半はヘラ削り。

(4)　ＳＫ５出土土器（ＰＬ12―136～148）

須　恵　器

蓋（136・137）　２個出土したが、いずれもつまみを欠く。136は天井部が平坦、137は丸い。右まわりのロクロで削っている。口縁端部の折りかえしは両者とも強くない。

高杯（138）　口径11.5cm、深さ3.3cmをはかる小形の杯部の破片。

長頸壺（139）　まるい体部にラッパ状にひらく口頸部のつく長頸壺。頸部に２条の沈線を入れる。胴部と頸部のとりつけは３段構成。外面全体に暗緑色の自然釉がつく。

土　師　器

杯B（144）　外傾する口縁部に外へふんばった高台のつく杯。摩滅して調整技法は不明。時期のくだる混入品かもしれない。

蓋（140）　口径20.5cm。つまみを欠く。天井部上面はヘラ磨きしている。

皿（145）　口縁部は内弯し端部はまるい。底部下面はヘラ削り。他は風化著しく不明。

椀（141～143）　口径12cm～13cm。高さ4.3cm前後。口縁端部はやや外反する。口縁部下半から底部は指先でおさえたままの不調整底。他はなでて仕上げる。暗文はない。

甑（147・148）　口縁端部に段のあるもの147とないものがある。体部は外面を縦ハケ目、内面は上方を横ハケ目、下方はヘラで削るものが多い。148は底部の破片で、中央に１孔を穿っている。

甕A（146）　下半を欠くが、小形の甕。口縁部内面にも横ハケ目。内面胴下半は削り。

(5)　ＳＫ４出土遺物（ＰＬ13―149～187）

須　恵　器

杯（149・150）　149は口径15cmの無台の杯Ａ。底部はヘラ切り不調整。150は11.2cmの口径に対して深さが5.3cmある深手の杯でしっかりした高台がつく杯Ｂ。底部下面はヘラ切り不調整。

蓋（151・152）　151は偏平なつまみにまるい天井部のつくもの、天井部は右まわりのロクロでヘラ削り。152は宝珠形つまみにヘラ削りした平らな天井部の蓋。ロクロは右まわり。

高杯（153）　口径11.5cm、高さ3.2cmをはかる小形の杯部の破片。

台付長頸壺（154・155）　154はラッパ状に開く長い頸部。中央に沈線が入る。155は外にふんばる短い脚に３条の沈線を入れた稜のある体部片である。

甕（156）　大形甕の口縁部破片。２条の沈線の下に波状文がある。

土　師　器

杯（157～160）　高台のつかない杯Ａはいずれも口縁部内面に方射状暗文がある。口縁部外面

は160ではヘラ磨きが明瞭にみえるが、他は器表の風化もあってよくわからない。ただ横なでだけで終らず、ヘラ削りかあるいはヘラ磨きを加えているらしい。底部外面はヘラ削り。157は外にふんばったやや背の高い高台をもつ杯B。摩滅著しく技法不明。

皿（161～164）　口径20cm～21.5cm。164の口縁部はやや外反し端部は上に肥厚する。内面には間隔のあらい放射状暗文がある。底部下面はヘラ削り。161～163は風化して器表の観察はむずかしいが、底部下面はヘラで削っているものと思われる。

蓋（169・170・171）　宝珠形のやや大きいつまみのつく蓋で、天井部上面はヘラ削りとハケ目が一部にほどこされる。内面はなでて仕上げる。171は大形の宝珠形つまみ。

椀（165～168）　口径12.5cm～13cm。165～167は口縁端部で小さく外反する。器面の調整は口縁部外面と内面を横なで、底部は不調整。168は横なでの巾が広い。

高杯（172～175）　高さ6.5cm～9.5cmある麓が大きくひらく面取りをした脚部。杯部は不明。面取りは10～12面。内面はなでている。

甕A（176～178）　口径は16cm前後。口縁部は短く外反するが、端部のつくりはそれぞれ異る。178の底部は体部から延長してそのまま丸底にうつらずわずかに屈折し、やや平坦に作る。外面はいずれも縦ハケ目。内面は177と178ではヘラ削り。176は口縁部まで横ハケ目。

甕B（179・180）　口縁端部は上方に肥厚する。内面は横ハケ目のあるものとないものがある。

鍋（181）　口径40cm。外反する口縁部は外にややふくらむ。外面は剝離し技法不明。

土錘（182～187）　長さ5.5cm前後、径約1.2cmの紡錘型の土錘。10点出土している。

(6)　ＳＢ20・SK28・SK24・SK55・ＳＢ26出土土器（PL13—188～192）

188は土師器杯Ａで口縁部は途中で外反する。底部は不調整らしいが、他は風化しては不明。

189は須恵器杯Ａ。底部下面はヘラ切りのままで、わら状の圧痕がつく。

190は口径12cmの内面にかえりの付く蓋で、つまみを欠く。天井部上面はヘラ削り。

191は口径15cmの須恵器杯Ａ。底部下面はヘラ切り痕が残り、削りは加えていない。

192は口径31cmをはかる強く外反する大形の土師器鉢。内外ともハケ目調整。底下面は不調整。

(7)　ＳＢ59出土土器（ＰＬ14—193～199）

土　師　器

杯A（196）　口径17.8cm、高さ約5.5cm。口縁部は横なで、底部は不明。

椀（193～195・197）　194は平面が楕円形を呈する椀。193・194・195とも口縁部内外面は横なでしており、底部は不調整。197は口径19cmの大形の椀で、内面は方射状暗文とラセン状暗文を組んで施している。外面はこまかいハケ目の上をヘラで磨いている。

甑（198）　両側に把手がつき底に半円形の蒸気孔のあくもの。外面は縦ハケ目、底部近くはヘラで削る。内面は横ハケ目をほどこす。

甕B（199）　外反する口縁部の端部は上方に肥厚する。胴部下半は不明。外面は縦のハケ目。内面にもわずかに横ハケ目が残っている。

(8)　ＳＢ60出土土器（ＰＬ14—200～202）

須恵器台付長頸壺、土師器椀、甕が出土した。202は外にふんばった短い脚部、肩に稜のある体部からなるもの。頸部を欠く。形態はＳＫ４出土の155と類似するが、肩に沈線をめぐらさない。200の土師器椀は口縁部が横なで、底部は不調整。201は小形の土師器甕で外面上半は縦ハケ目、下半は斜めハケ目。内面は横ハケ目をほどこす。下半はヘラ削り。

(9)　ＳＢ30出土土器（ＰＬ14—203・204）

204は小形の土師器甕。外面上半は荒い縦ハケ目、下半は斜めのややこまかいハケ目。内面は口縁部まで横ハケ目。下半はヘラ削り。形態技法とも201に近い。203は長胴の甕。外面の調整は普通にみられる縦ハケ目。内面はなでており横ハケ目はない。

(10)　ＳＫ17出土土器（ＰＬ14—205）

口径30cmの大形長胴の甕。外面縦ハケ目。内面は口縁部まで横ハケ目。下半はヘラ削り。

(11)　ＳＫ56出土土器（ＰＬ14—206）

長方形の透しを入れた円面硯の脚部の破片。透しの下端には沈線がめぐる。

以上みてきたようにこの時期の土器は、竪穴住居址・土坑などから比較的まとまって出土している。しかし土師器の保存状態が悪く須恵器の出土量が圧倒的に少いこともあって現状では各遺構出土品の形式の差を明確にすることはむずかしいが、須恵器については前後の二形式にわかれるものと考えている。

土師器については、杯・皿・椀・甕ともそれぞれに多少の形態技法の差はあるが、金剛坂遺跡出土品に類似するところが多い。杯・皿は口縁部を横なで、その下半から底をヘラ削りしているもの[5]が多く、方射状暗文を描くものもある。また口縁部外面をヘラ磨きしたものもあるが、多くは保存不良で不明な点が多い。椀は口経の小さなものは共通して灰茶褐色を呈する外面不調整（141・165・200など）のもので、大形のものは茶褐色を呈し暗文とヘラ磨き（197）で飾っている。高杯は杯部は不明であるが、総じて脚の短い面取りをしたものである。甕は大小あって器面の調整にはハケ目を多用し、内面下半をヘラで削るのを通例とする。口縁部の形態はさまざまで外反の度合い、端部のまとめ方などで形式や時期の差を決定するにはいたっていない。

須恵器は、全体に黒灰色を呈し粗い胎土のものが多く、南方７kmの外城田川上流部に展開する

外城田古窯址群出土品に近い。杯は口径に大小があって、小形のものでは有返蓋と組むもの(112)高台を有し器高の高いもの（122）があり、口径の大きい無台のものなどがある。蓋は小形のかえりのあるものと、偏平なつまみをもつかえりのない大形のものがある。高杯はいずれも小形である。長頸壺は肩に稜のあるものとないものがあり、高台も外にふんばる短い脚の付くもの(155・202)と低い高台のつくもの（124）がある。

これらの時期については、金剛坂遺跡同様７世紀末～８世紀初頭を中心とするが、小形の有返蓋および台付長頸壺の形態からみてＳＢ25、ＳＢ60、ＳＫ４、ＳＫ24等はややさかのぼる７世紀後半の時期におかれよう。また須恵器をともなわないが、ＳＢ59、ＳＢ30も同様のものと思われる。一方、ＳＫ３、ＳＫ５は偏平なつまみをもつかえりのない蓋をもっており８世紀の前半にもとめることができよう。ところでＳＤ65出土品は黒色土が埋まった巾広い溝の各所から出土したもので122須恵器杯や土馬のように古いもの、124・125・126等新しい様がうかがわれるものなど両方の時期にわたるものが出土している。
⑥

4　平安時代前期の土器

この時期の遺物は非常に少い。遺構にともなうものは、ＳＫ31とＳＫ32出土土器のみである。

(1)　ＳＫ32出土土器（ＰＬ14—209）

杯（209）　口縁部が強く外反する土師器杯。口縁部は横なで。底部は凹凸の多い不調整底。

(2)　ＳＫ31出土土器（ＰＬ14—207・208）

灰釉皿（207）　口縁端部が小さく屈曲する皿で、全面に淡緑色の灰釉がかけられている。

土師器椀（208）　口径16cm、高さ3.8cm。外傾する口縁部は端部近くで強く横なでして外反する。底部と口縁部下半は指先でおさえたままの不調整底で凹凸が多い。前代の土器と比較すると器壁は薄い。以上の土器は平安時代前半のものと思われる。類似する土器は度会郡御薗村高向遺跡から多量に出土している。
⑦

5　鎌倉時代前期の土器

この時期の遺物はＳＤ50大溝の下層および中層の土器が大半をしめる。大溝以外にはまとまって出土した土器は少い。

(1)　ＳＤ50下層出土土器（ＰＬ14—211～223・ＰＬ15—224～230）

山茶椀（211～214）　口径16cm～16.5cm、高さ６cmのものが大半で、214のような18cmの大形のものは少い。口縁部は腰にやや丸味をもち端部で外反する特徴をもつ。口縁部に指先でおさえた輪花をもつものもみられる。高台はていねいな作りのものが多い。底部下面は糸切り痕をとどめたもの、なでたものはあるが、ヘラ削りしたものはない。口縁部の３～４ヶ所に灰釉を「つけがけ」したものもある。213は口縁部を指でおさえ片口にしている。これら山茶椀は全体に砂の多い粗い胎土で、灰色に焼成されている。形態や技法、胎土等から渥美半島古窯址群の製品と考えられる。

山皿（215～217）　口径9.2cm～9.5cm、高さ2.5cm～３cm。高台をもつものと、⑧もたないものがある。216は山茶椀のスタイルを小形化したタイプで、やや古いものかもしれない。３個とも底部は糸切り痕をとどめる。

鉢（218）　口径25.7cm、高さ9.4cm。大きく外反する口縁部をもつ大形の鉢。口縁部はロクロ目がよく残り、底部は糸切り痕はなくなでて仕上げる。灰黄色を呈し一部で茶褐色の発色を示す。内外面に火だすきがみられる。

壺（219）　口径14.2cm、高さ23.5cm。外反する口縁部と上位で肩の張った体部と不調整の平底からなる壺。全面に暗緑色の釉があり、肩部には釉の盛り上りがみられる。自然釉か施釉したものかは不明。猿投窯の製品と考えられる。

土　師　器

皿Ａ（223）　口径15cm、高さ3.4cm。口縁部が内弯しながら大きく開く糸切り痕をとどめる皿。茶褐色を呈し、胎土中に砂を多くふくむ。口縁部にはロクロ目がよく残っている。ロクロによって製作していることが注意される。

小皿（220～222）　7.5cm～９cmの小形の皿。220と221は手づくねのもの。222は底部に糸切り痕を残す。前者の胎土は砂粒を多くふくみ黄褐色を呈し、土師器甕のそれに近い。後者は砂粒を含まない精良な土を使用している。

甕（225～230）　口径22cm～26cm。端部を内側に折り重ねて段をつくる特徴的な口縁部をもつ土師器甕。体部下半を欠くが、伊勢市大藪遺跡出土品からみて球形の体部をもつものと思われる。体部の調整にはハケ目を使わずなでているが、外面の⑨仕上げは荒く凹凸がはげしい。器壁は全体に厚い。糸切り痕のない皿と同様黄褐色を呈するものが多く、また砂粒の多い土を使っている。

カマド（224）　上部の孔は径約23cm。高さ約35cm。口縁端部は帯状に厚くつくる。焚口上面には廂をつけるが、側面にはない。側面は両側から粘土帯を張り付けて補強している。器壁は厚く、なでて仕上げるが凹凸がはげしい。灰黄褐色を呈し砂粒の多い土を使う。内外面に煤がつく。

(2)　ＳＤ50中層出土土器（ＰＬ15—231～251・ＰＬ16—252～257）

山茶椀（231～238）　大きさ、形態、技法とも下層出土品とよく一致する。灰釉を「つけがけ」

したもの、輪花をほどこしたもの、高台に糸痕のつくものがある。

山皿（240・241）　高台のあるものと、ないものがある。底部には糸切り痕。

鉢（239）　口径33cm、高さ13cm。内弯する深い口縁部に断面三角形の高台のつく鉢。破片で口縁部全周は不明であるが、数ヶ所に輪花をほどこしている。口縁部下半はヘラ削り。底部は一方向のヘラ削り。胎土・焼成は山茶椀と同じ。

壺（242）　平底の胴部下半の破片。内面は灰色、外面は灰黒色で淡緑色の自然釉が流れる。

甕（243）　大形甕の底部破片。底部下面は不調整。内面灰色、外面 :黒色。渥美窯の製品か。

青磁鉢（257）　口径17cmの鉢。口縁端は外側に肥厚し帯状を呈する。外面下半はヘラ削り。口縁部下半を除き全体に灰青色の釉がかかる。器壁は白色で非常にかたく焼成されている。

土　師　器

皿A（250・251）　口径15.5cm、高さ4cm前後。底部に糸切り痕をのこしロクロ目の目立つ皿。胎土は黄褐色を呈する砂粒が多い土で、皿Bとさしてかわらない。

皿B（244～247）　口径15cm前後、高さ2.5cm～3cm。口縁部上半は横なで、底は凹凸の多い不調整底。黄褐色を呈し砂粒が多い。器壁は全体に厚手で247のように底の薄いものは少い。

小皿（248・249）　口径約9cmの手ずくねの厚手の小皿。黄褐色を呈し砂粒多い。

甕（252～256）　形態・技法・胎土とも下層のものと非常によく似た甕。

(3)　SD63・発掘区各所出土土器（PL17－293・298・301～304）

293は、「中」を墨書した山茶椀の底部。SD50下層の山茶椀によく似ている。298は砂粒の多い胎土の土師器小皿。301～304は大溝中下層に類似した山茶椀。

SD50大溝出土土器は、PL7に示したように大きく4層に区別して検出した。このうち下層と中層からは、山茶椀・山皿・鉢・壺・甕などの須恵器系の日常雑器と皿・甕・カマドなどの土師器が出土した。ここで注意されるのは、山茶椀・山皿と土師器皿である。前者の山茶椀・山皿についてはほとんどすべてが粗質の陶土を使っており、渥美半島古窯址群特有の製品であることが注目されよう。また後者の土師器皿のなかで底部に糸切り痕を残すロクロで製作された皿の存在も注意されるところである。

ところで、中層と下層の土器をそれぞれ対比してみると形態上の差はさしてみとめられない。ただ山皿についてみると、両層とも高台のあるものとないものがあるが、下層のものにやや古い形態をみとめることができそうである。時期については、鎌倉時代前半にあたるものと思われる。

6　鎌倉時代後期の土器

この時期の遺物は、SD50大溝上層・SD19・SD18等の溝から出土している。C地区からは

室町時代にくだる遺物はほとんどないが、茶釜形の土師器が1点出土している。

(1) ＳＤ50大溝上層出土土器（ＰＬ16—258～280）

遺構のところでも述べたようにこの大溝は東半部については全掘したが、西半は1ｍ前後掘り下げたにすぎない。従って上層と中層の遺物の取り上げにあたっては多少の混乱が考えられる。

山茶椀（258～265） 口径15.5㎝前後、高さ5.3㎝前後で中層下層にくらべるとやや小さい。口縁部は腰に丸味が少なく、高台も全体に低くなりその取り付けも荒くなる。施釉されたものはなく、輪花を施すものも稀である。260は口縁端を一部欠いて灯明皿として使用しており、内面全体に煤がつく。265の底には「大」の墨書がある。下層・中層同様渥美半島古窯址群の製品と考えられる。

山皿 （266）口径9㎝、高さ2.3㎝。口縁部はほゞまっすぐにのびる。底部には糸切り痕。

土　師　器

皿A（271）口径15㎝、高さ15㎝。底部に糸切り痕。ロクロ目が走る。

皿B（267～270）口径14㎝前後で前代のものよりやゝ小さくなり、口縁部にくらべて底部が薄くなる。底部の平坦な267・268と、やゝ丸くなる269・270がある。両者とも口縁部は横なで、底部下面は不調整で凹凸がはげしい。黄褐色を呈し、胎土には砂粒が多い。

脚（272）裾ひろがりの脚部片。体部は不明。器表はなでて仕上げる。茶褐色を呈する。

甕（273～280）口径22㎝から29㎝。口縁端部を内側に折り重ねて帯状を呈する特徴は前代と同様であるが、いくつかの点で変化している。口縁部は外反度が強く端部で屈折しており、口径にくらべて頸部のしまりが強くなる。また胴部の張りが強く器高が小さくなって偏平になっている。口縁端部では、折り重ねが少くなり強くなでつけるため段が小さくなり凹部をつくる。胎土は中下層と同様砂粒の多い土を使うが、器壁は簿くなっている。器面の調整は内外とも上半はなでおり凹凸がある。下から⅓は内外ともヘラ削りしている。

(2) ＳＤ19出土土器（ＰＬ17—281～291）

山茶椀（281・282）281は口径15㎝、高さ5㎝。282はそれぞれ14㎝、4.8㎝。両者とも口径・器高とも小さい。口縁部の腰の張りも少い。口縁端部は281では外側に面をつくる。両者ともに高台は低く、取りつけもひどく荒くなって糸切痕がつく。底部下面には糸切り痕を残す。282の底部には文字は不明瞭であるが、墨書されている。

青磁椀（283）不透明な灰青色の釉が高台末端をのぞき全体にかかった青磁椀。

土　師　器

皿（284・285）口径14㎝前後。不調整の底部は口縁部にくらべて薄い。胎土は砂粒が多い。

甕（286～291）口径20㎝の小形のもの42㎝の大形のものまで各種あるが、強く外反する口縁部の

内側に粘土を折り重ねてなでつける特徴はＳＤ50大溝上層と同じである。体部も胴の張った偏平なもの。289ではこの胴の張りがやゝ下にある。器面の調整は内外とも上半はなで、下半はヘラ削り。288の内面はなでているらしい。286の口縁部は折り重ねていない。

(3)　ＳＤ18出土土器（ＰＬ17—295～297）

片口鉢（295）　口径21㎝をはかる片口の鉢。底部は不調整。口縁部上半は外側のみおさえて内弯させている。ロクロ目がよく残り内面には淡緑色の自然釉がつく。

土師器皿（296）　口径11.8㎝の薄手の皿。黄褐色を呈し胎土中には砂をふくまない。

青磁椀（297）　花弁状の文様を彫った上に灰青色の釉をかけたもの。

(4)　ＳＤ43・ＳＤ11・ＳＸ71出土土器（ＰＬ17—292・294・300）

292は、口径27㎝、高さ19㎝、形態技法等ＳＤ19出土の甕とよく類似する。

294は、まっすぐ外傾する口縁部に低い高台をつけた山茶椀。底部には糸切り痕を残す。

300は、口径38㎝の大形の土師器甕。口縁端部内側は粘土を折り重ねなでつけている。

299は、発掘区東北端で単独に出土した。腹部につばを付けた球形の体部に直立する口縁部の付く壺形土器。外面はつばより下を内面では上をヘラ削り。茶褐色を呈し胎土は精良である。室町時代にくだるものと思われる。

この時期の主要な遺物は、ＳＤ50大溝上層とＳＤ19溝の土器である。上層出土土器を中下層のそれと対比してみると、山茶椀については、口径器高ともやや小さくなり、腰の張りが少く、高台も取り付けが荒くなる。輪花もまれである。土師器の甕は口縁端の外反度が強くなり、口縁部内面の折り重ねも少くなり、器壁も薄く作るなど相当変化がみとめられる。皿も小形化し薄手になる。山茶椀は前代同様渥美半島古窯址群の製品と考えられる。

ＳＤ19については遺構のところでふれたように、出土土器も山茶椀はさらに簡略化が進み、土師器皿はまだ砂粒の多い土を使うが、さらに薄手に変化している。甕はさして変わっていない。

これらの時期については、ＳＤ50大溝上層は鎌倉時代後期のなかでも古い時期、ＳＤ19はそれよりややくだる時期におかれよう。なお299のつば付の壺形土器は、単独で出土しており伴出遺物はないが、胎土、技法からみて室町時代にくだるものと思われる。

(1)　紅村弘『東海の先史遺跡』名古屋鉄道株式会社
(2)　小玉道明『伊奈富遺跡』「国鉄伊勢線関係遺跡調査報告」鈴鹿市教育委員会　1967
(3)　田辺昭三『陶邑古窯址群Ｉ』平安学園研究論集10　1966
(4)　岸俊男・猪熊兼勝他『藤原宮』奈良県教育委員会　1969
(5)　山沢義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』明和町教育委員会　1971
(6)　飛鳥・奈良時代の土器については奈良国立文化財研究所、小笠原好彦氏・安達厚三氏から多くの御教示をえた。
(7)　伊藤久嗣『高向遺跡』「南勢バイパス埋蔵文化財調査報告」三重県教育委員会　1973
(8)　中世陶器の生産地および年代については名古屋大学・楢崎彰一氏の御教示をえた。
(9)　吉水康夫『大藪遺跡』「南勢バイパス埋蔵文化財調査報告」三重県教育委員会　1973

V 結　　語

古里遺跡は、斎宮段丘西部に展開する10万m²以上の広大な遺跡であるが、その大半が宅地造成予定地に含まれることになり、昭和44年から同46年まで分布調査および範囲確認のための試掘調査と、南端のA地区ならびに中央のB地区の発掘調査をおこなっている。前章まで詳細にわたって報告してきた今回の発掘調査は、B地区の東隣り30mに約3,000m²の調査地区を設定し、これをC地区と呼び、B地区を横断する飛鳥奈良時代および鎌倉時代の大溝址の延長部の追求と、飛鳥奈良時代の遺構の確認を主眼としておこなったものである。

調査の結果、各種の遺構が調査地区全域から検出され、その時期も弥生時代から鎌倉時代にわたっており、当遺跡が弥生時代以来長期にわたって断続的に形成された遺跡であることが明らかになった。これまで遺物については各項の末尾に若干のまとめを記したのでここでは遺構についてのまとめと二三の注意される点を記して結語とする。

弥生時代の主な遺構は竪穴住居址である。これは径約6.5mの円形プランをもち中期中葉の時期におかれるものである。これまで伊勢における弥生時代の集落址の調査は、四日市々大谷遺跡①・永井遺跡②・西ヶ広遺跡③・鈴鹿市東庄内遺跡④など主に北伊勢でおこなわれている。その成果から見ると、前期および中期の住居址は円形プランをとり後期には方形に変わる様相が指摘されるが、南伊勢でもこうした変遷を確認できそうである⑤。

古墳時代の遺構は5基の方形周溝址と削平された古墳跡1基がある。方形周溝址は一辺17m前後の大型のものと、10m前後のもの二種類があり、遺構の重複や発掘区域外におよぶものもあって明確にできないが、陸橋部をもつものもみとめられる。周溝内から出土した土器の形式からこれらは5世紀末から6世紀初に作られたことが知られるが、盛土、主体部とも確認されなかった。これは、掘立柱建物と重複することから奈良時代にはこのうちのいくつかが破壊され、他のものも鎌倉時代には削平されたためと思われる。こうした遺構がいわゆる方形周溝墓とすると、これまで調査されたもののうちでは最も新しい時期にあたるものと考えられるが、当遺跡のなかには12基の円墳群からなる塚山古墳群⑥も現存しており、方形墳の封土が全く削平され、墳麓の周溝だけが検出されたとも考えられる。その決定は今後の調査にまちたい。

飛鳥奈良時代の主な遺構は、竪穴住居址8棟と掘立柱建物10棟がある。これら二者は一部で重複しており、後者の建物の方向および配置に一定の規則性がみとめられるところから両者が併存したとするよりも、遺物の章でのべたように竪穴住居が先に成立し掘立柱建物が後れてつくられたものと考えている。その時期については、前者が7世紀後半、後者が8世紀前半におかれるものと思われる。なお、B地区で検出したこの時期の大溝は、その延長部にあたるC地区においては確認できなかった。

竪穴住居は8棟あり発掘区東半に集中してみとめられた。その平面は方形ないし長方形で不整

形なものが多く面積も27m²と小さい。柱穴は明確でなく、かまど址と思われる焼土は主に東辺にみとめられた。こうした特徴は、南1kmにある金剛坂遺跡の竪穴住居⑦にもみられる。方形ない長方形の整ったプランと柱穴をもつ北伊勢の竪穴住居との相異点は注意されるところである。

竪穴住居が廃絶した後建てられたと考えられる掘立柱建物は発掘区東半で10棟検出した。これは床束をもち平面形が3間×3間の方形をなす高床の倉庫とみられるもの4棟、3間×3間・3間×4間の平面が長方形をなし東に廂の付く住居と考えられる建物4棟、2間×2間・2間×2間以上の小規模な建物2棟である。建物の配置をみると、西側に倉庫を置き東側に住居を配しており、それらの方位は北東―南西の方向に柱通りをほゞそろえている。

このように一部で小形の建物が重複するところもあるが、これらの遺物は、その配置および方位に一定の計画性がうかがわれ、同一時期の可能性が大きいと考えられる。掘立柱建物はこれまでB地区で住居址と倉庫が、C地区で住居が検出されているが相当の距離があり棟方向も異なっているので、それらはC地区とは別のグループであろう。

ところでこうした住居と倉庫の組みあう同時期の遺跡は、多くの陶硯を出し大規模な建物群を有し地方官庁と推定される四日市々西ヶ広遺跡⑧、竪穴住居と掘立柱建物が併存する一般集落跡とされる同貝野遺跡⑨、永井遺跡⑩などがある。当遺跡については建物の数や平面規模は西ヶ広遺跡に較べて小さいが、その配置と方位に一定の計画性がうかがえることや、B地区で蹄脚硯が出土していることなどからみて、一般集落址とするよりはむしろ公的性格をおびたものの可能性が強いと考えられる。この地域においてこうした建物群の性格を考えるうえには隣接する斎王宮⑪との関係を配慮しなければならないが、現段階においては公的性格を一面に認めるとしても、両遺跡をつなぐ遺構としてはなお不明な点が多い。昭和48年度から県教委によって斎王宮跡の範囲確認の発掘調査が予定されているところであり、平行しておこなわれる当遺跡の調査との総合的検討がまたれるところである。

鎌倉時代の主な遺構は、SD50大溝のほか後半の時期にあたる小溝がある。このほか前半の素掘りの井戸が2基あるが、住居址は検出されなかった。巾3m～4m、深さ2.4m～2.7mをはかる大規模な素掘りの大溝は、略東西に台地を横切っており、B地区とあわせて延長202mを確認した。出土遺物からみて鎌倉時代前半に作られ、後半に埋まったものと考えられる。完掘した部分の溝底と考えられる粘土層上面の標高は、B地区・C地区とも9.5m前後を測る。一方、西側の延長部にあたる沖積地水田面の標高は、約10mで大溝底より約50cm高いことになる。従って、溝底の高さからみれば、祓川を取水口とする導水用の溝としての可能性も考えられる。東の延長部については、平坦な畑となっておりその痕跡は確認できないが、第二次大戦前後の開墾の前には斎王の森の北方松林中に土塁と溝の残存する部分があり⑫、小字境界とも一致することからこの大溝は北東方向に相当延長していたものと考えられる。こうした大規模な溝の性格を考えるとき、14世紀まで存続した斎王宮とのかかわりが注意されるところであるが、奈良時代の掘立柱建物群と同様今後の調査にまつところが多い。

(1) 小玉道明『大谷遺跡発掘調査報告書』四日市市教育委員会　1966

(2) 小玉道明・番条勇雄・森逸郎・伊藤洋『永井遺跡発掘調査報告』四日市市教育委員会　1973

(3) 小玉道明・下村登良男・山沢義貴・谷本鋭次『西ヶ広遺跡』「東名阪道路埋蔵文化財調査報告」三重県教育委員会　1970

(4) 小玉道明・谷本鋭次・山沢義貴『東庄内B遺跡』「東名阪道路埋蔵文化財調査報告」三重県教育委員会　1970

(5) 昭和48年2月に三重県教育委員会が実施した伊勢市中楽山遺跡から弥生時代後期の方形プランをもつ竪穴住居址が検出されている。

(6) 三重県教育委員会『中南勢開発地域遺跡地図』1971　直径10数m、高さ 1.5m前後のものが多い。3号墳から埴輪・玉類・馬具・須恵器が、11号墳から埴輪が出土している。

(7) 山沢義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』明和町教育委員会　1971

(8) 註3に同じ。

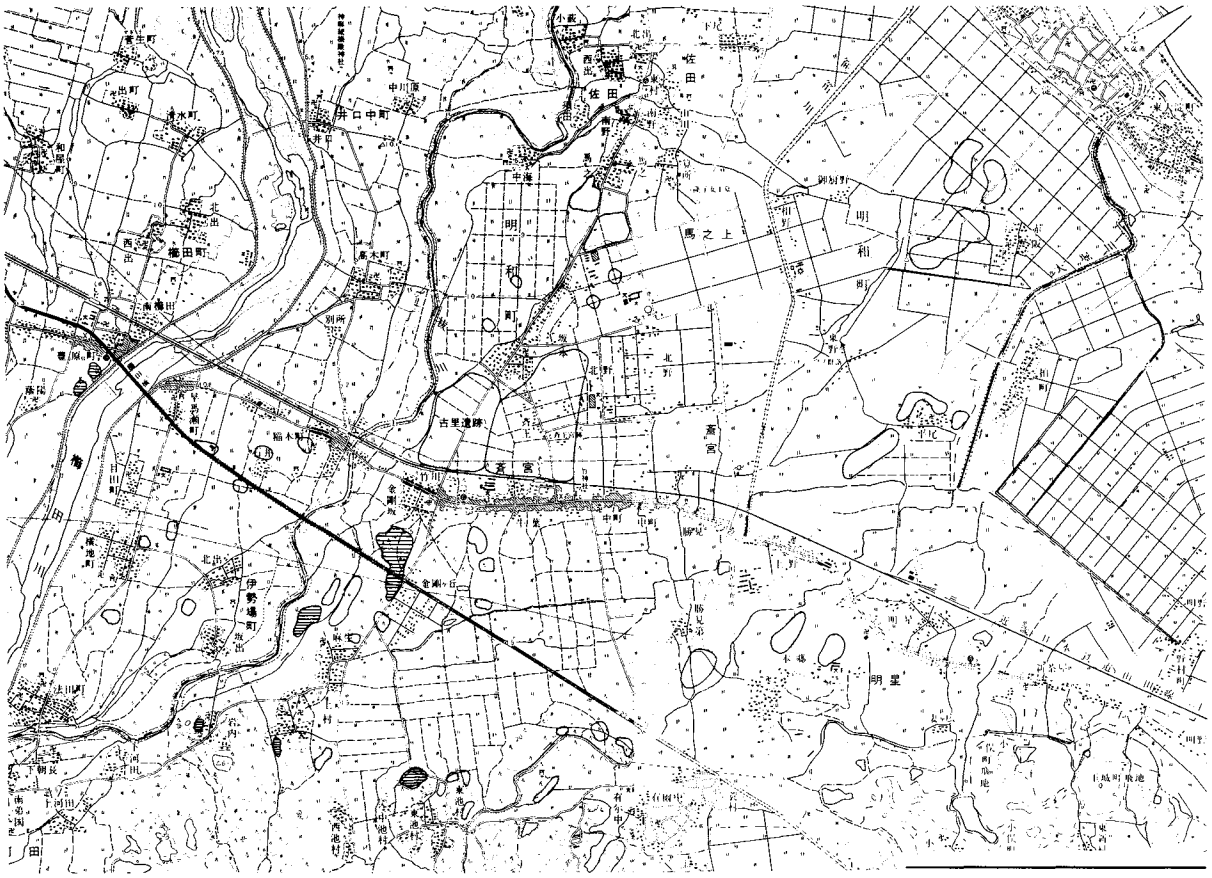
(9) 林博通『貝野遺跡』四日市市教育委員会　1969

(10) 註2に同じ。

(11) 直木孝次郎『神話と歴史』吉川弘文館
福山敏男『斎宮』「古里遺跡・斎王宮跡」三重県教育委員会　1973

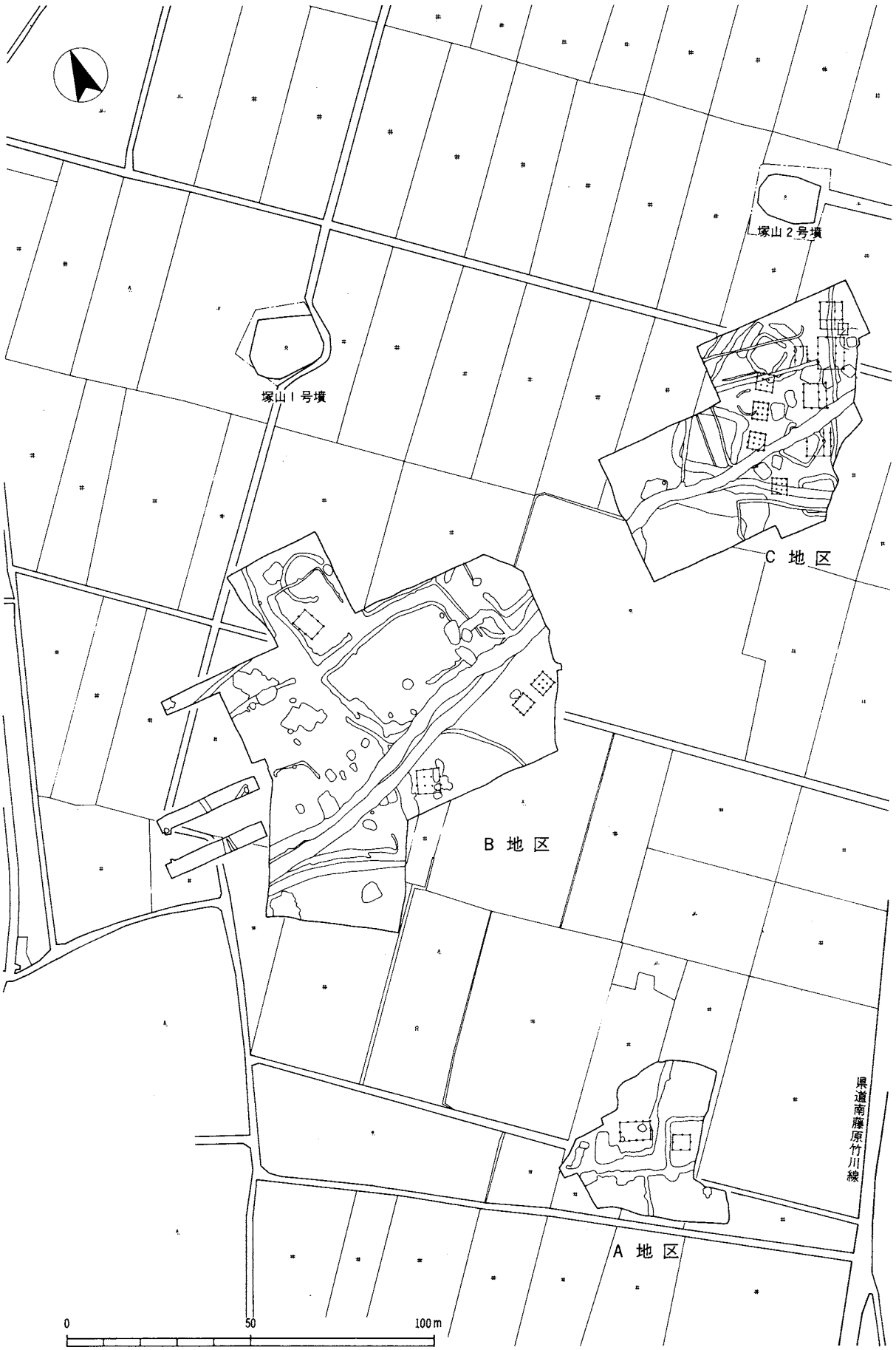
(12) 福山敏男氏の御教示による。

図　　版

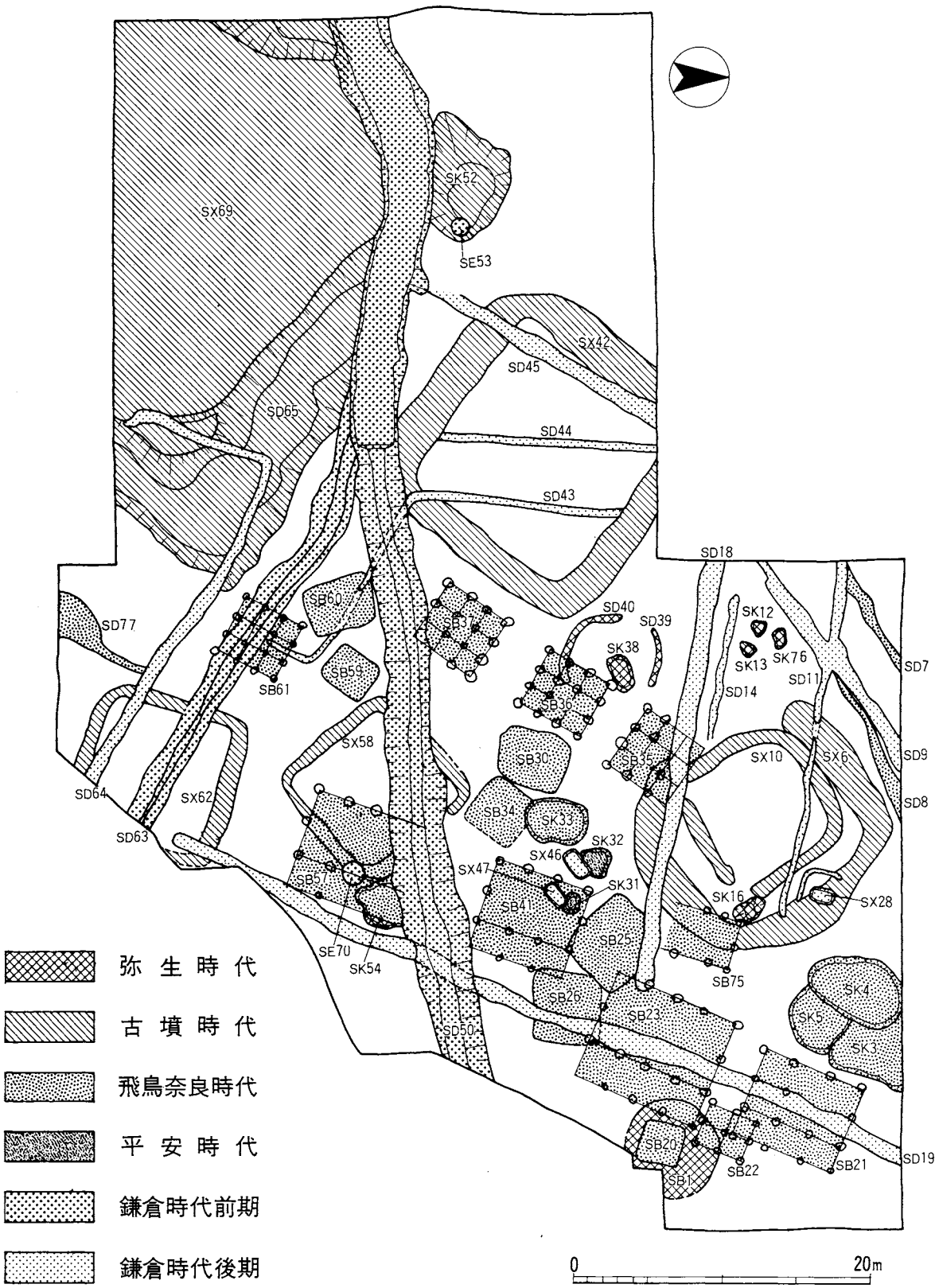


古里遺跡位置図（1：25000　松阪　明野　国土地理院）横線；弥生時代遺跡　○印；古墳時代以降遺跡

古里遺跡地形図（1：6000）



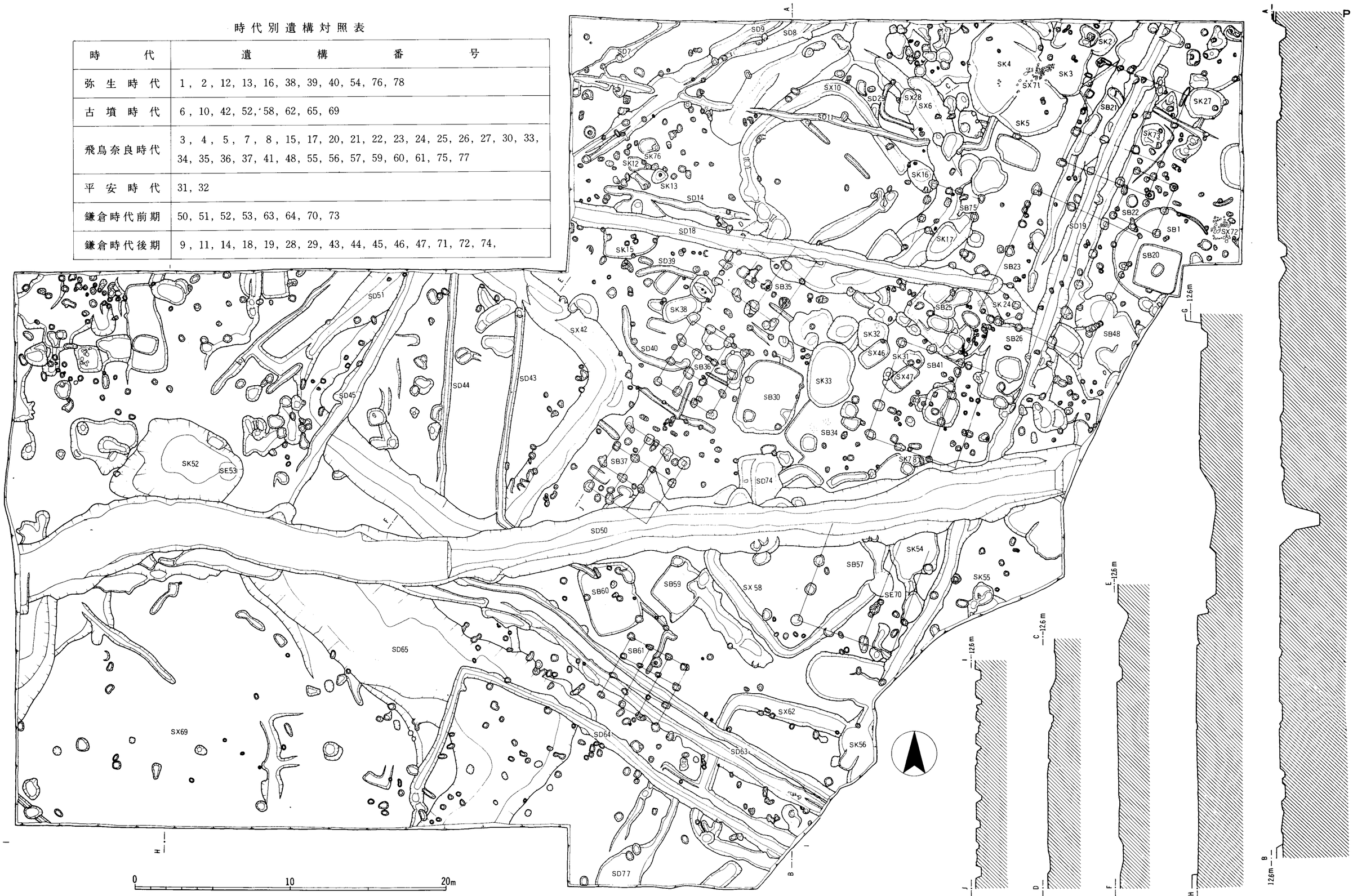
古里遺跡発掘区配置図（1：1500）



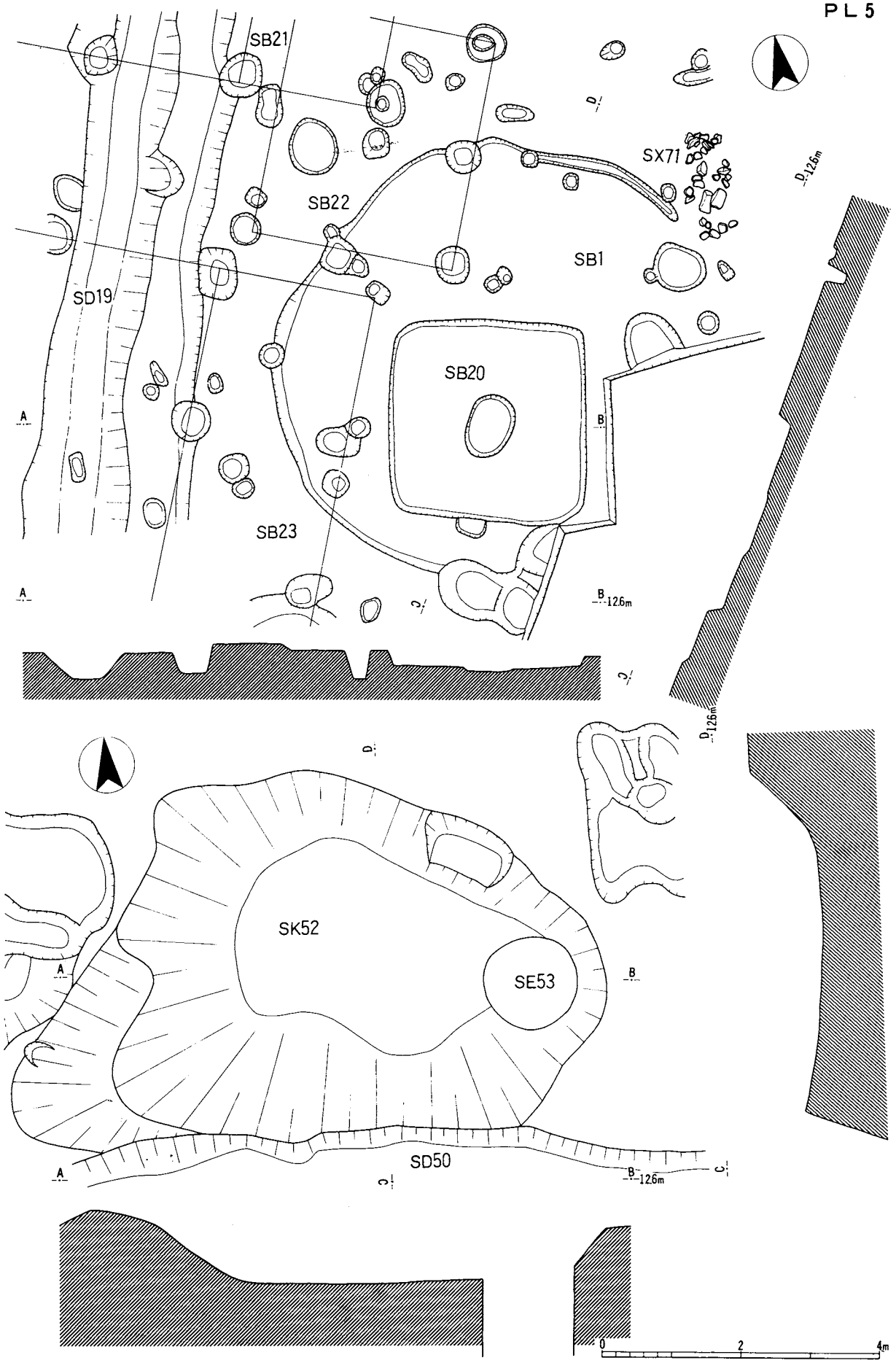
C地区遺構配置図（1：400）

時代別遺構対照表

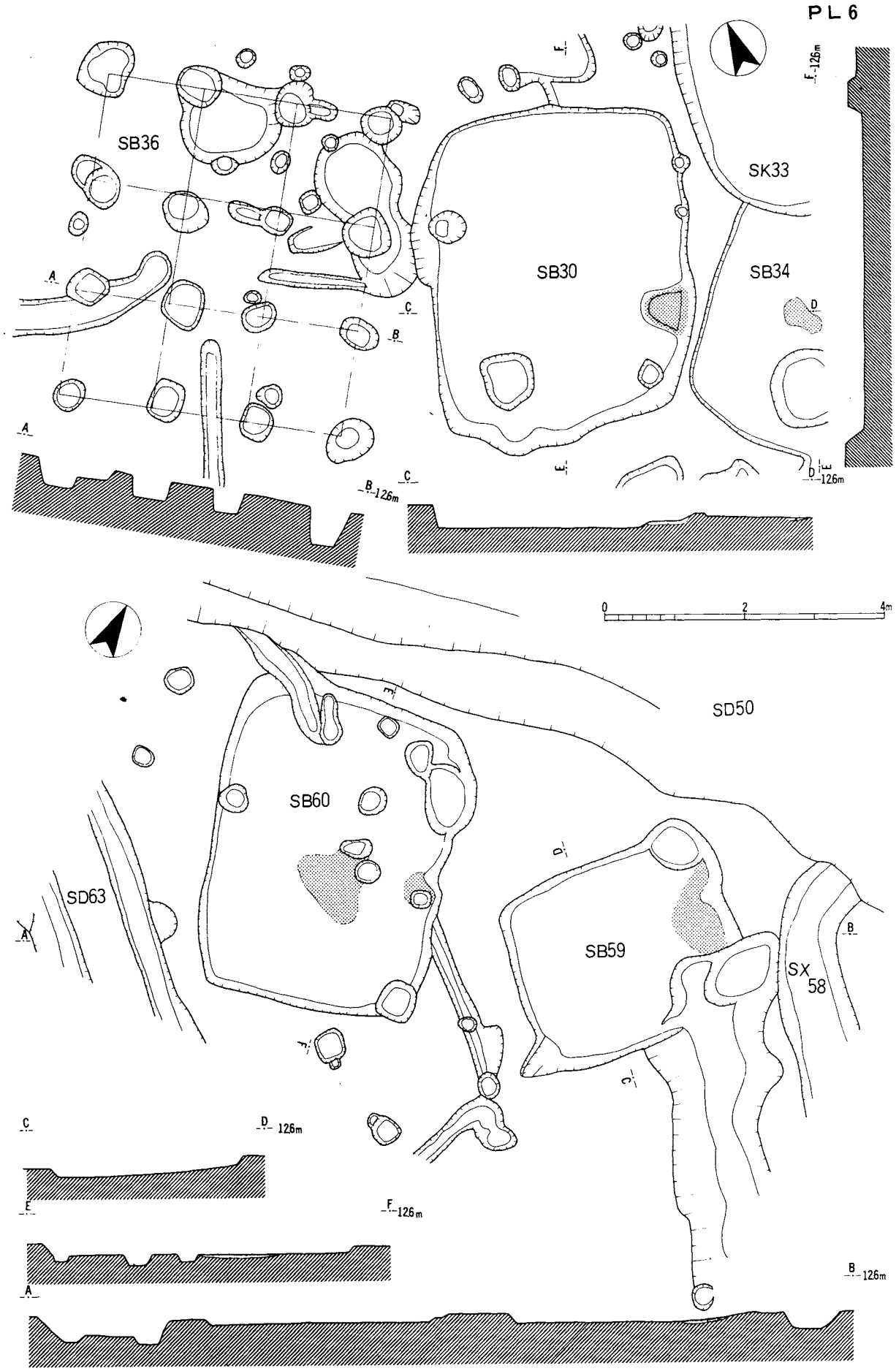
時　　代	遺　　構　　番　　号
弥生時代	1，2，12，13，16，38，39，40，54，76，78
古墳時代	6，10，42，52，58，62，65，69
飛鳥奈良時代	3，4，5，7，8，15，17，20，21，22，23，24，25，26，27，30，33，34，35，36，37，41，48，55，56，57，59，60，61，75，77
平安時代	31，32
鎌倉時代前期	50，51，52，53，63，64，70，73
鎌倉時代後期	9，11，14，18，19，28，29，43，44，45，46，47，71，72，74，



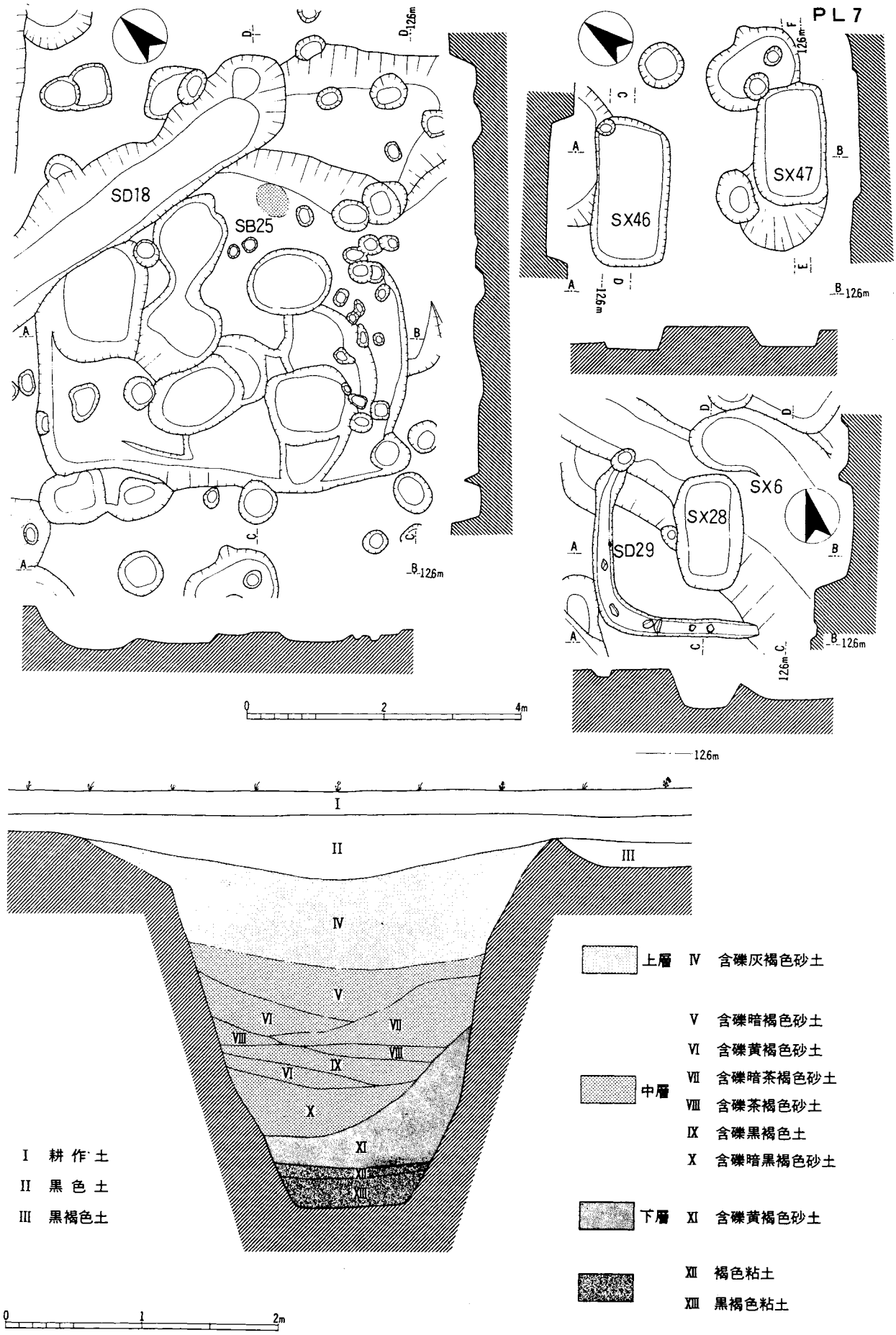
C地区平面図（1：200）



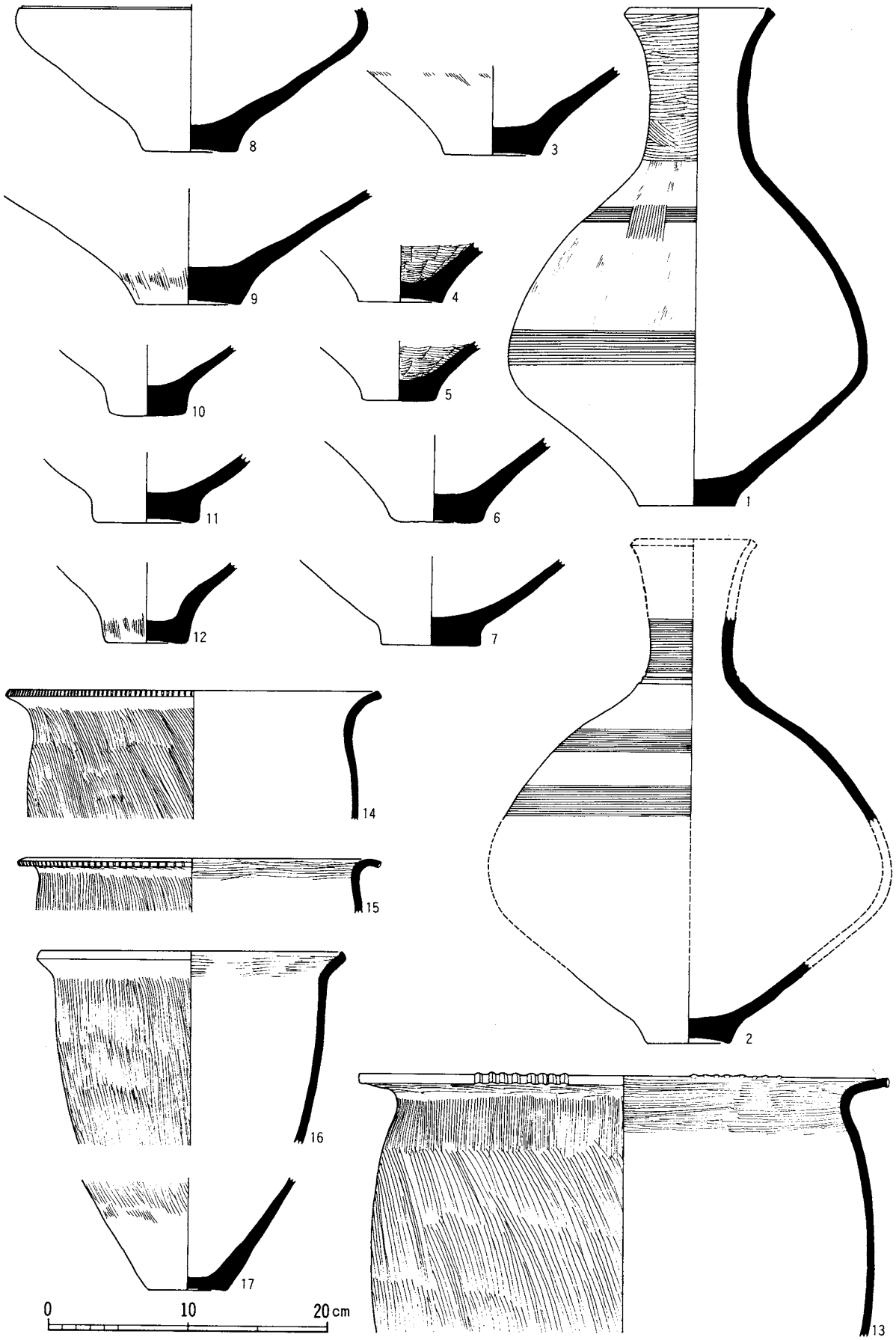
住居址・土坑実測図（1：80）



住居址実測図（1：80）



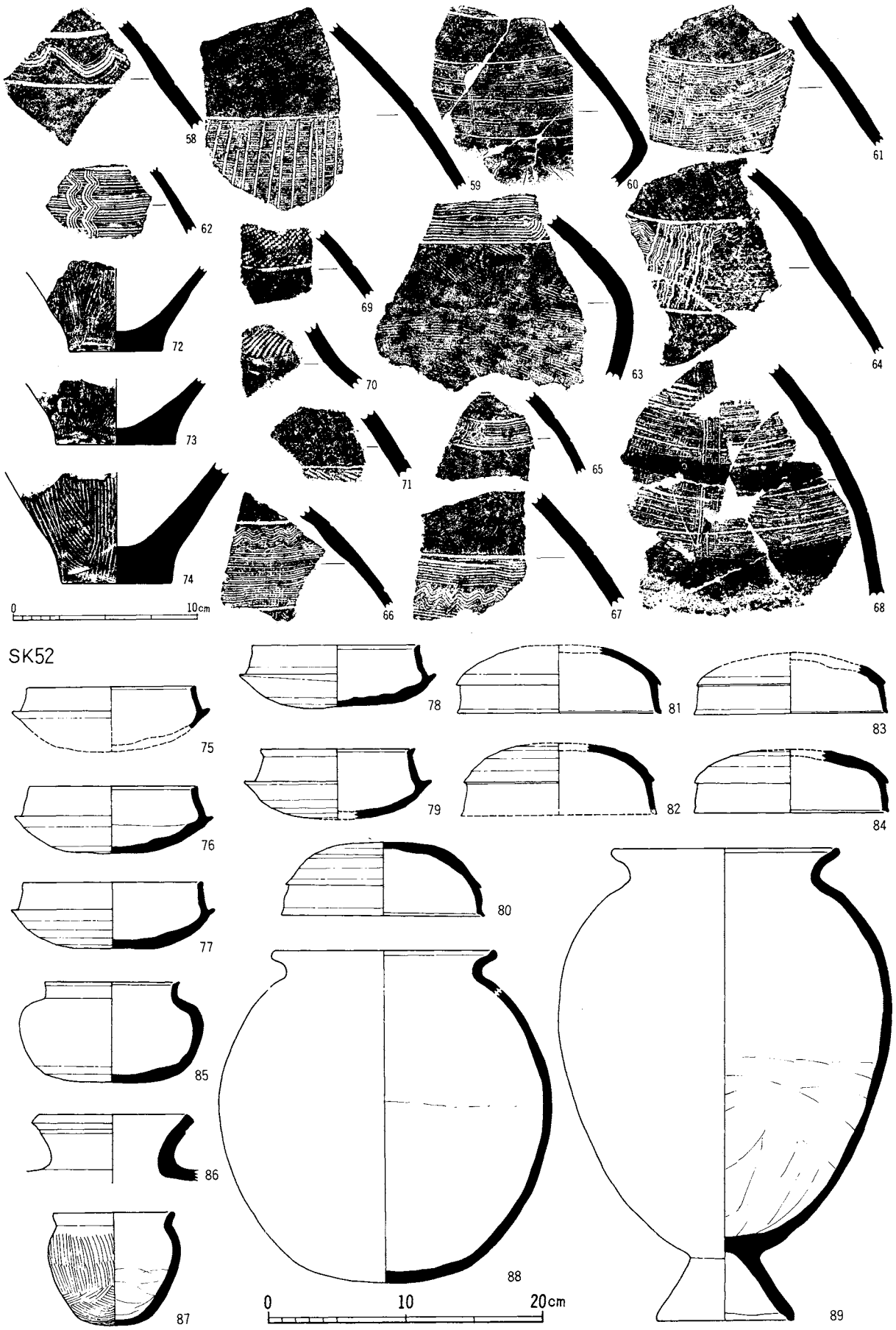
住居址・土坑・大溝実測図（1：80；大溝1：40）



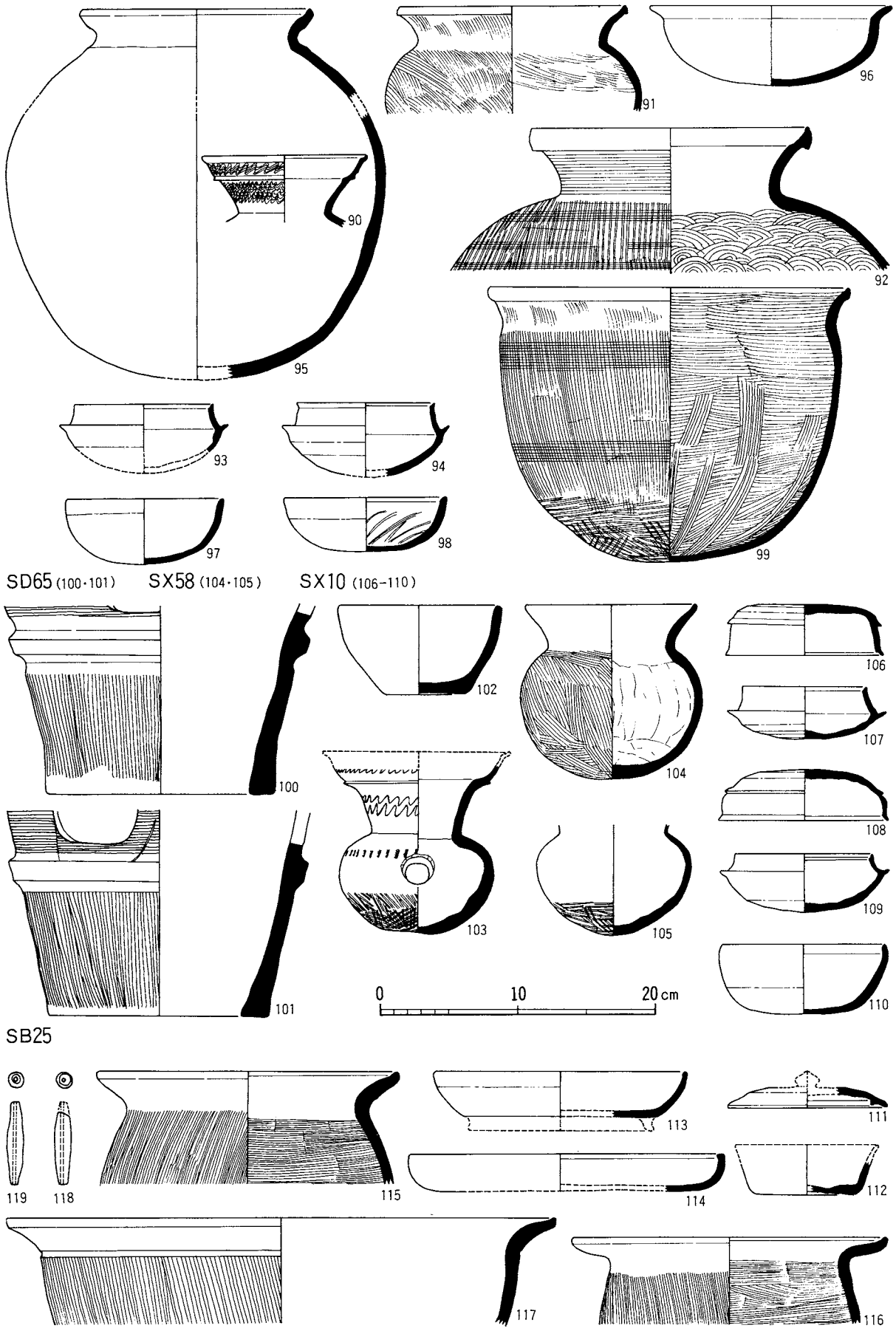
弥生時代土器（1：4）

18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
0
10cm

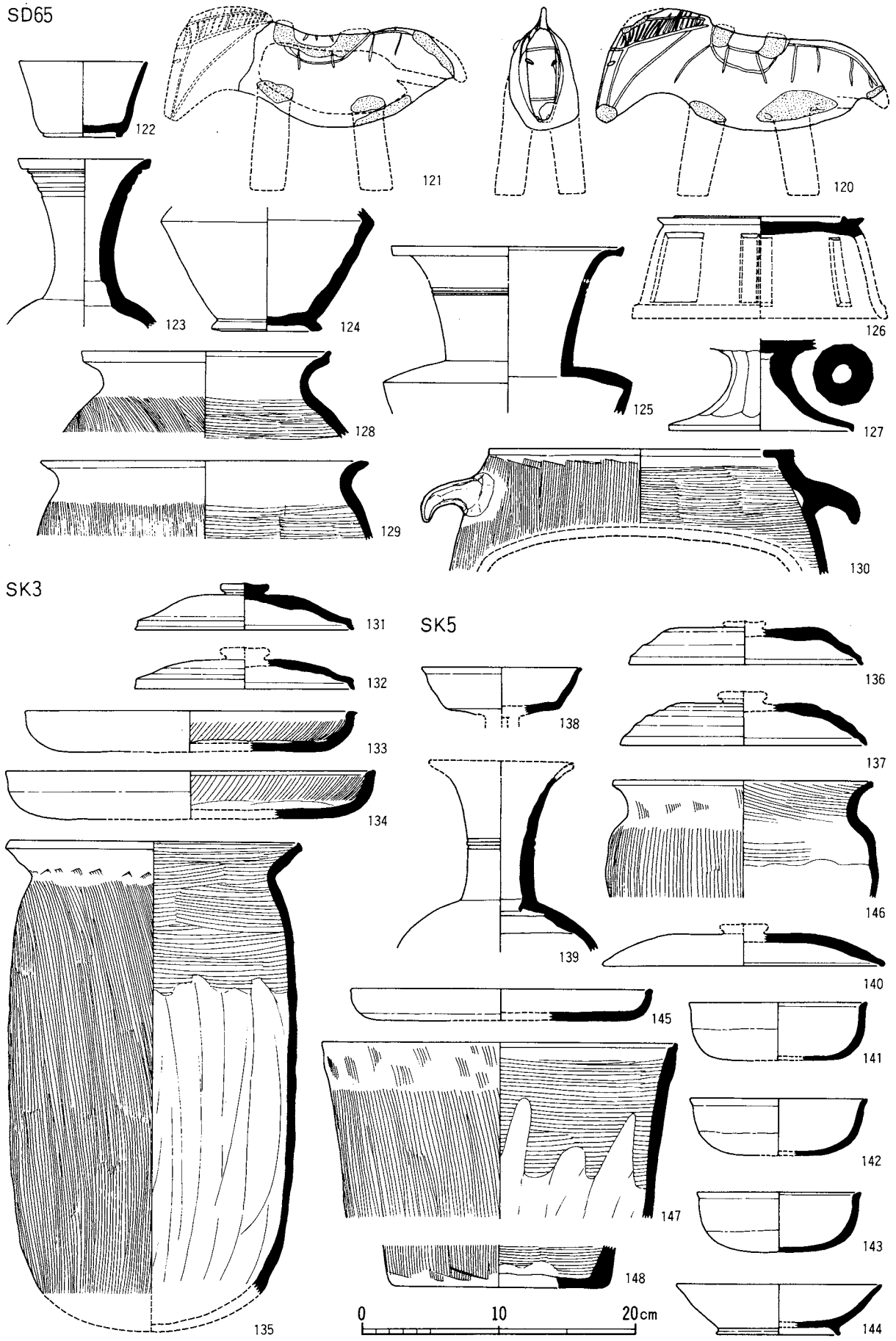
弥生時代土器拓影（1：3）



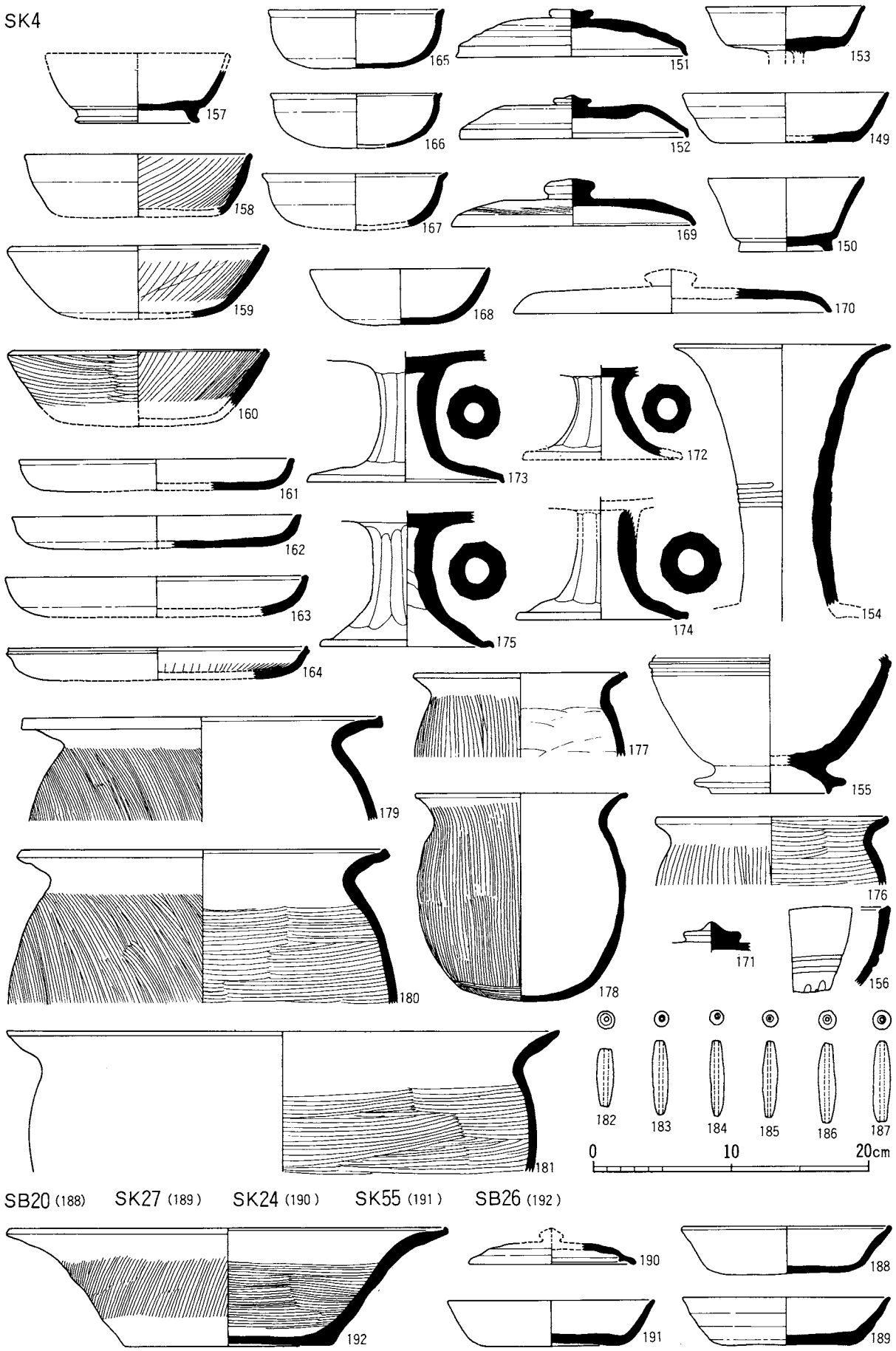
弥生時代土器拓影（58～74）（1：3）・古墳時代土器（75～89）（1：4）



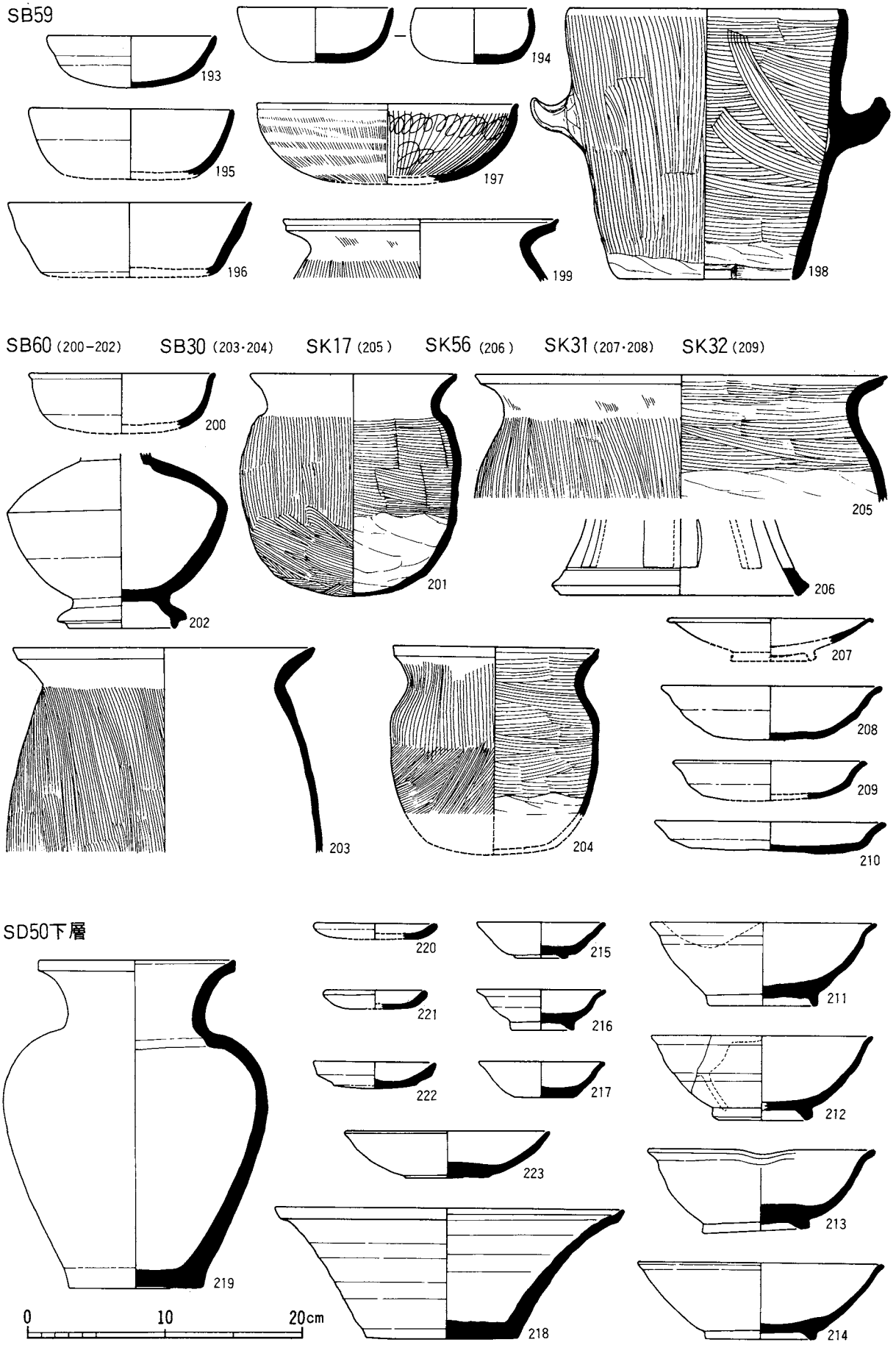
古墳時代土器（90～110）・飛鳥奈良時代土器（111～119）（1：4）



飛鳥奈良時代遺物（1：4、130; 1：6）

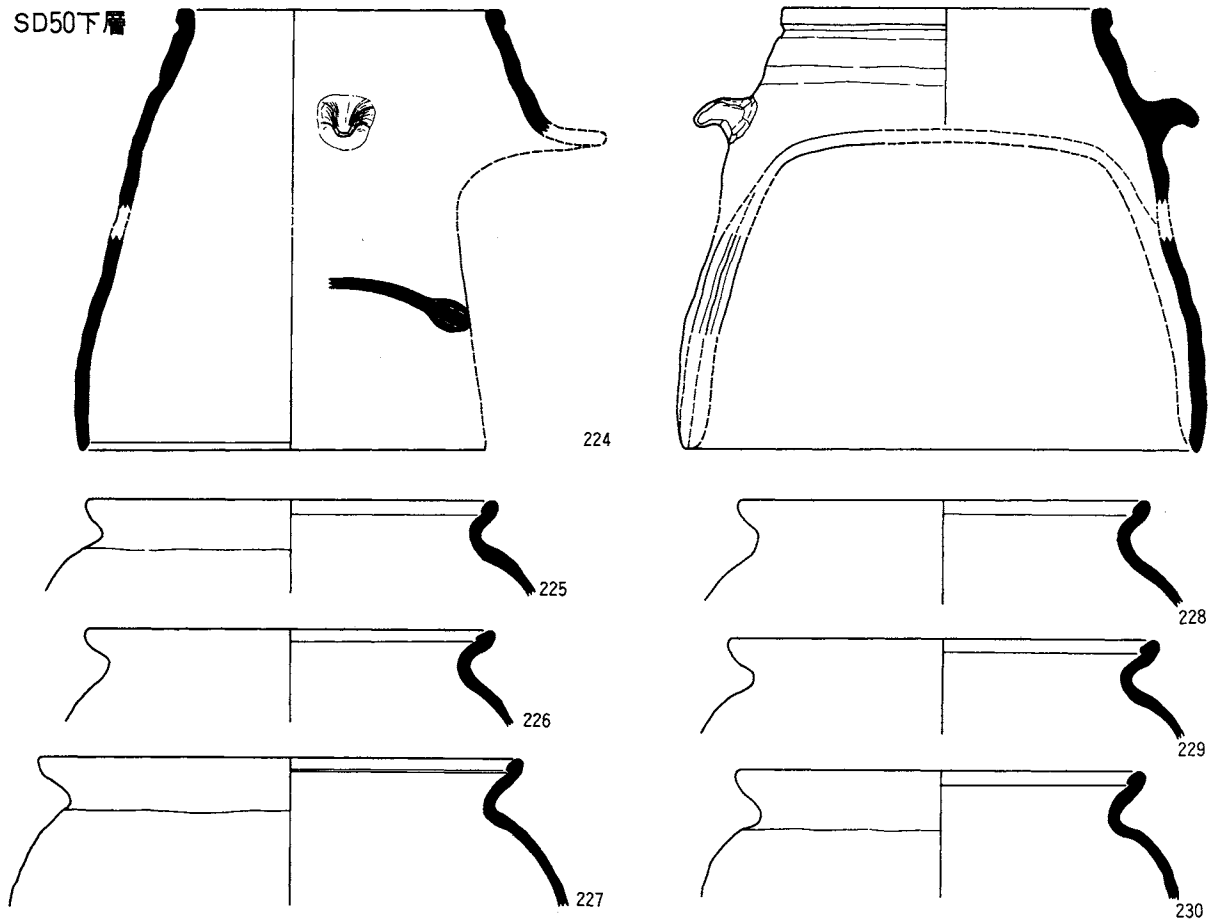


飛鳥奈良時代土器（1：4）

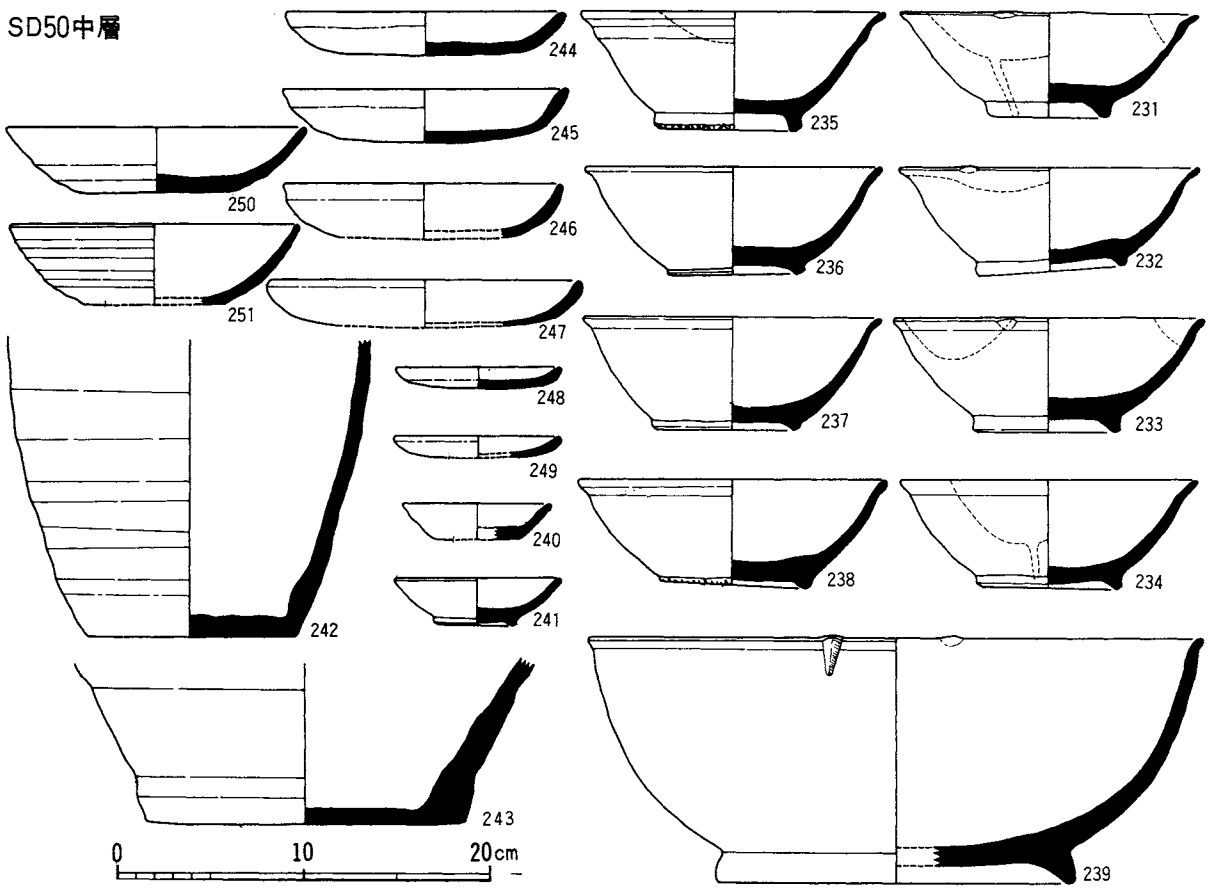


飛鳥奈良時代土器（193～206）・平安時代土器（207～210）・鎌倉時代土器（211～223）（1：4）

SD50下層

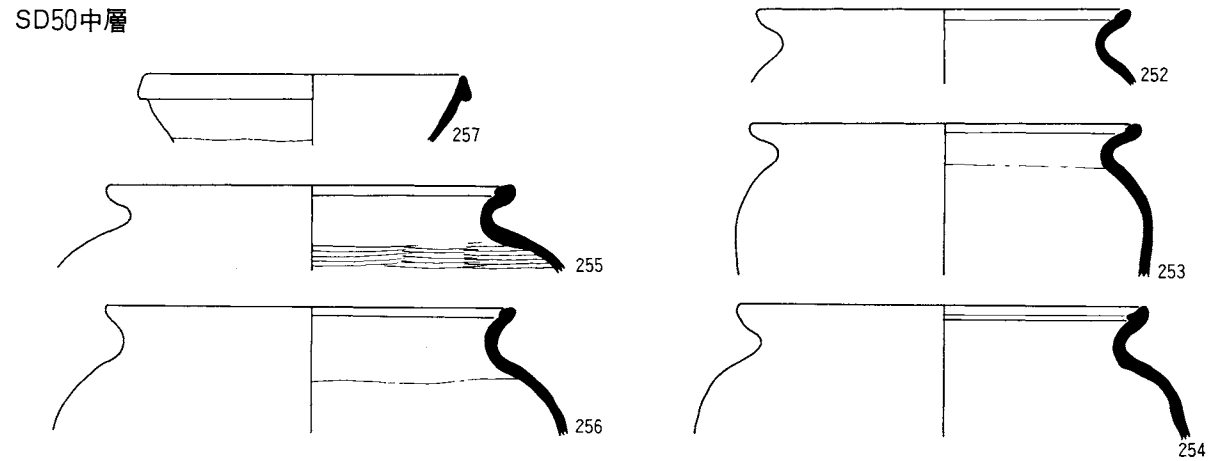


SD50中層

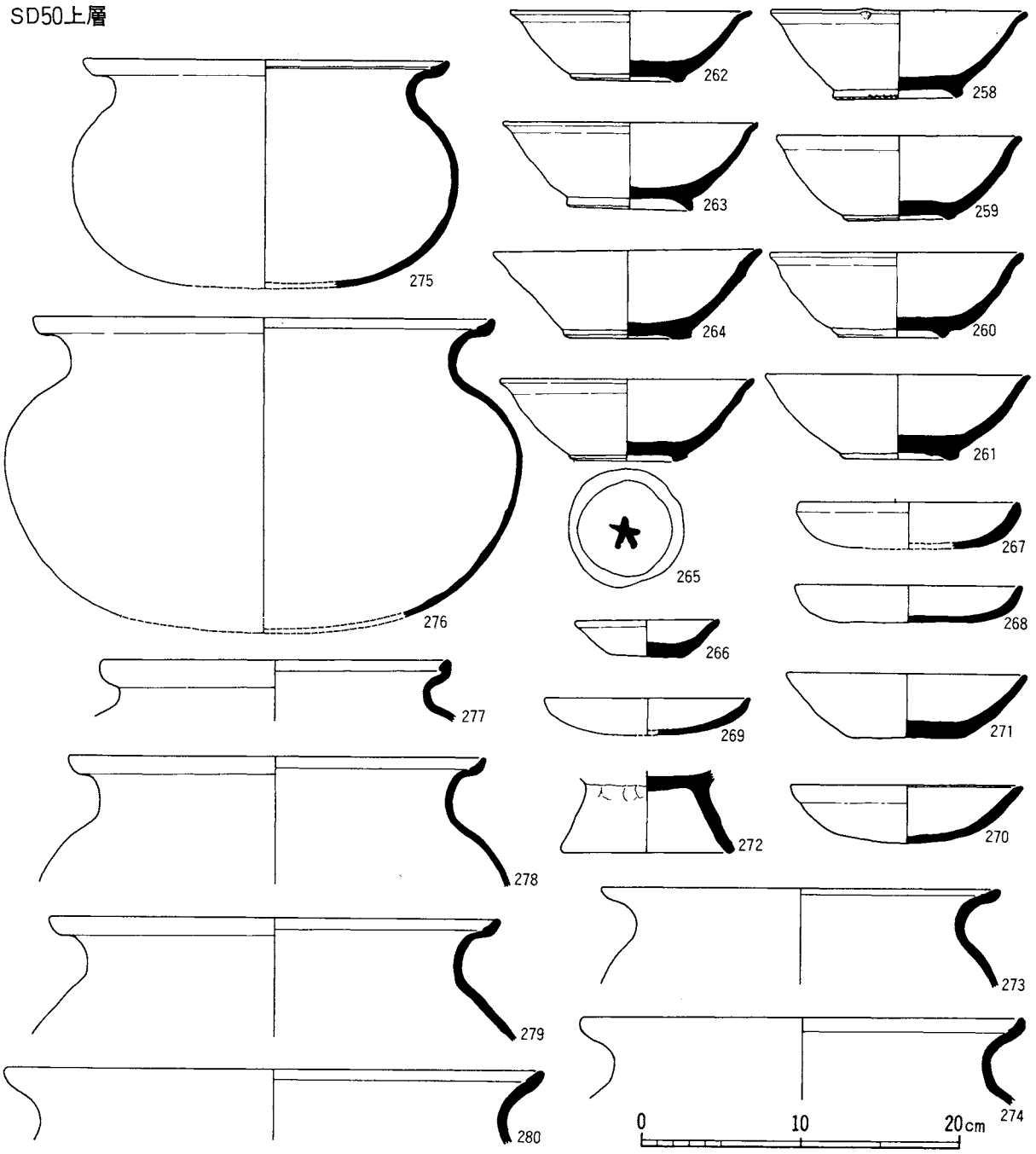


鎌倉時代土器（1：4、224; 1：6）

SD50中層

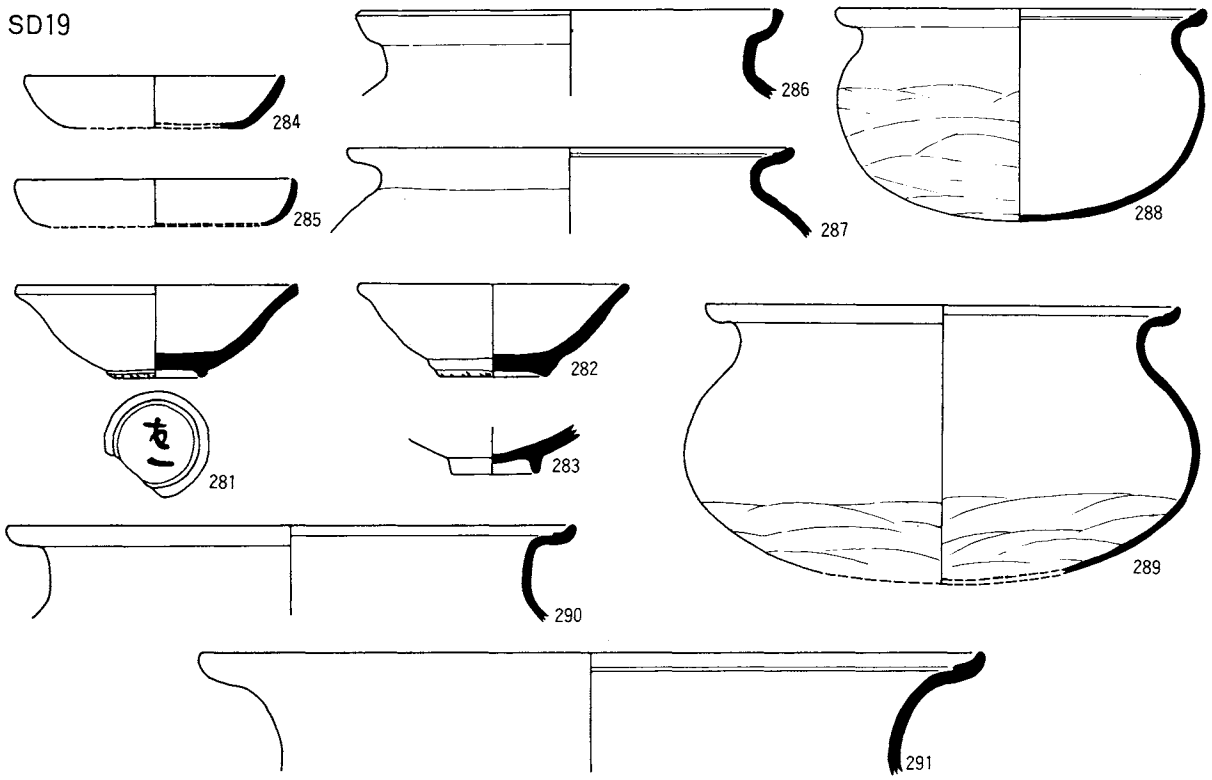


SD50上層

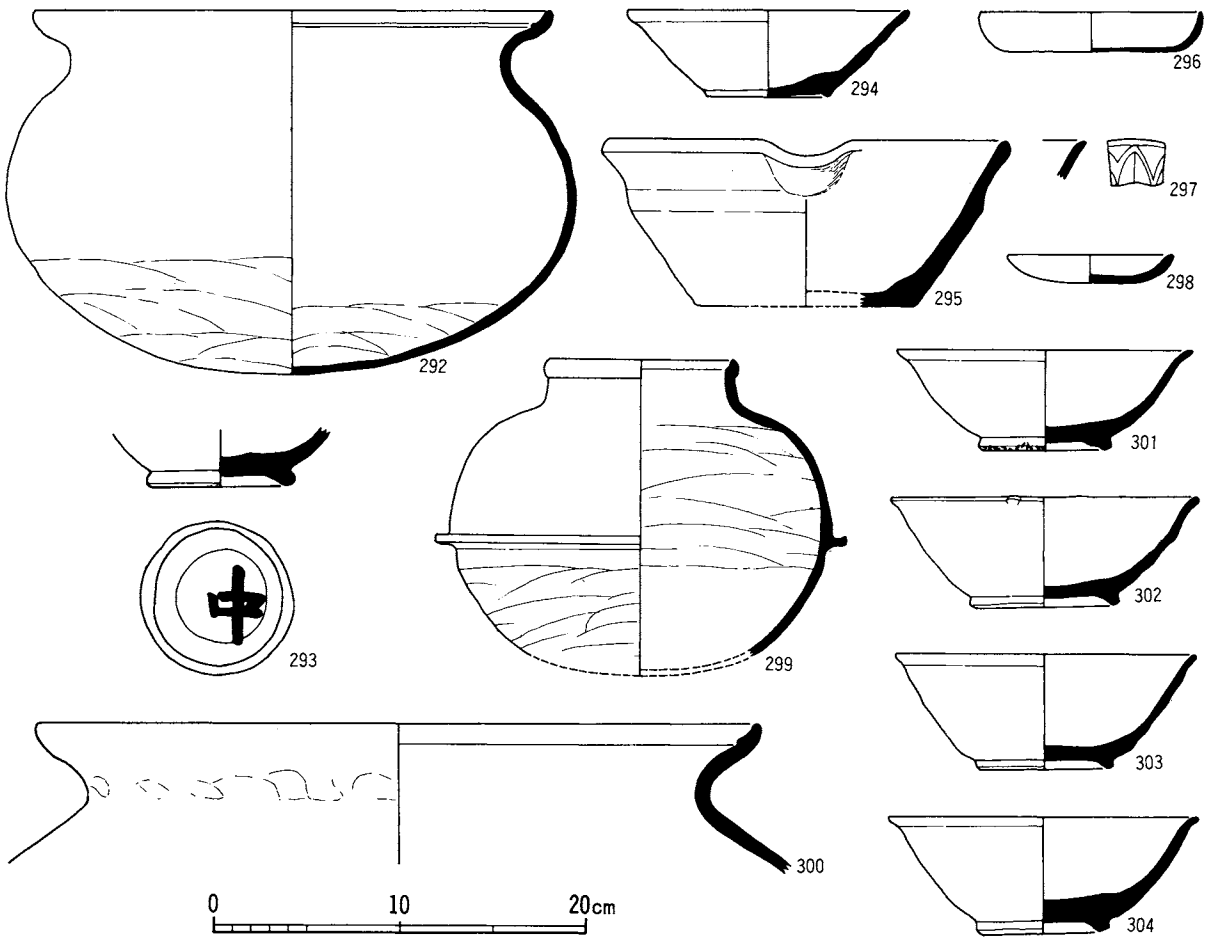


鎌倉時代土器（1：4）

SD19



SD43 (292)　SD63 (293)　SD11 (294)　SD18 (295-297)



鎌倉時代土器（281～298・300）・室町時代土器（299）（1：4）

遺 跡 全 景

C区全景（南から）

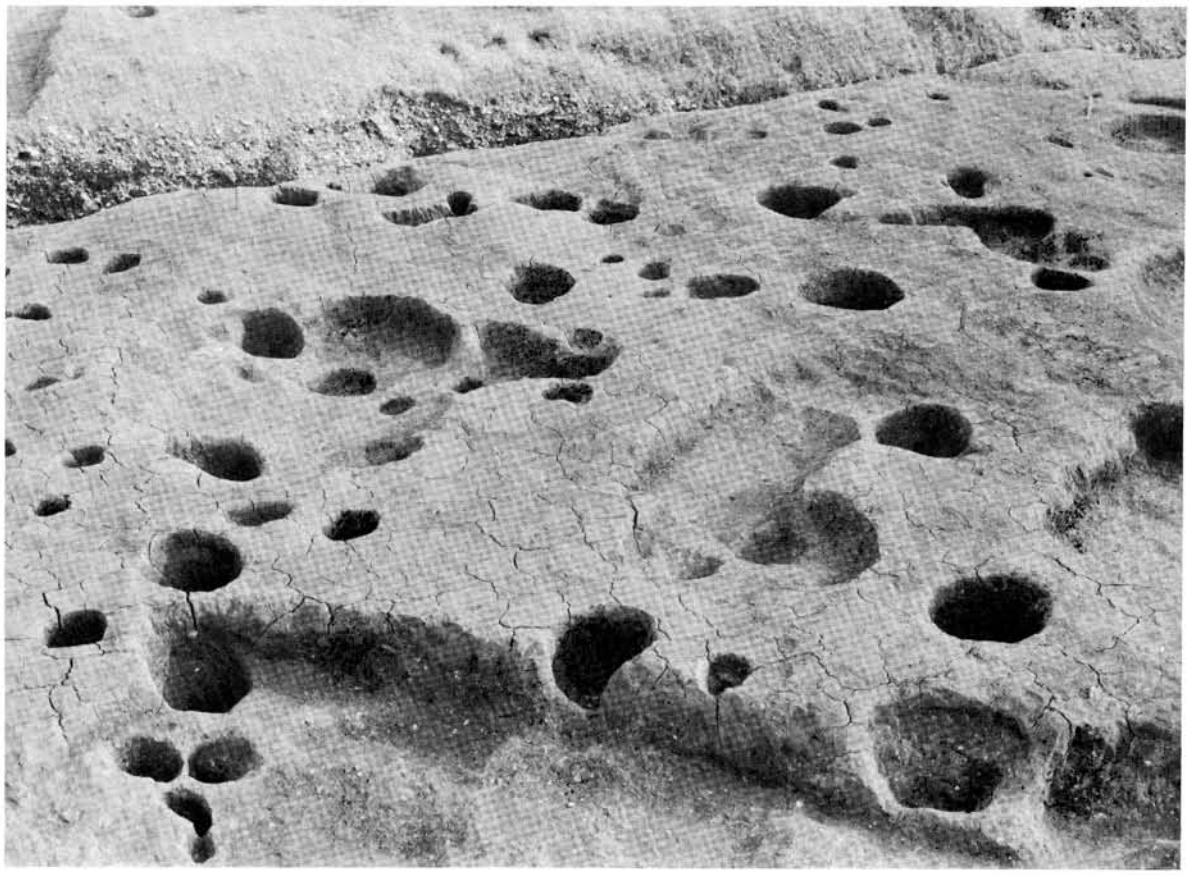
C区全景（東から）

SB1・SB20・SB21・SB22・SD19（南から）

SK33・SB30（北から）

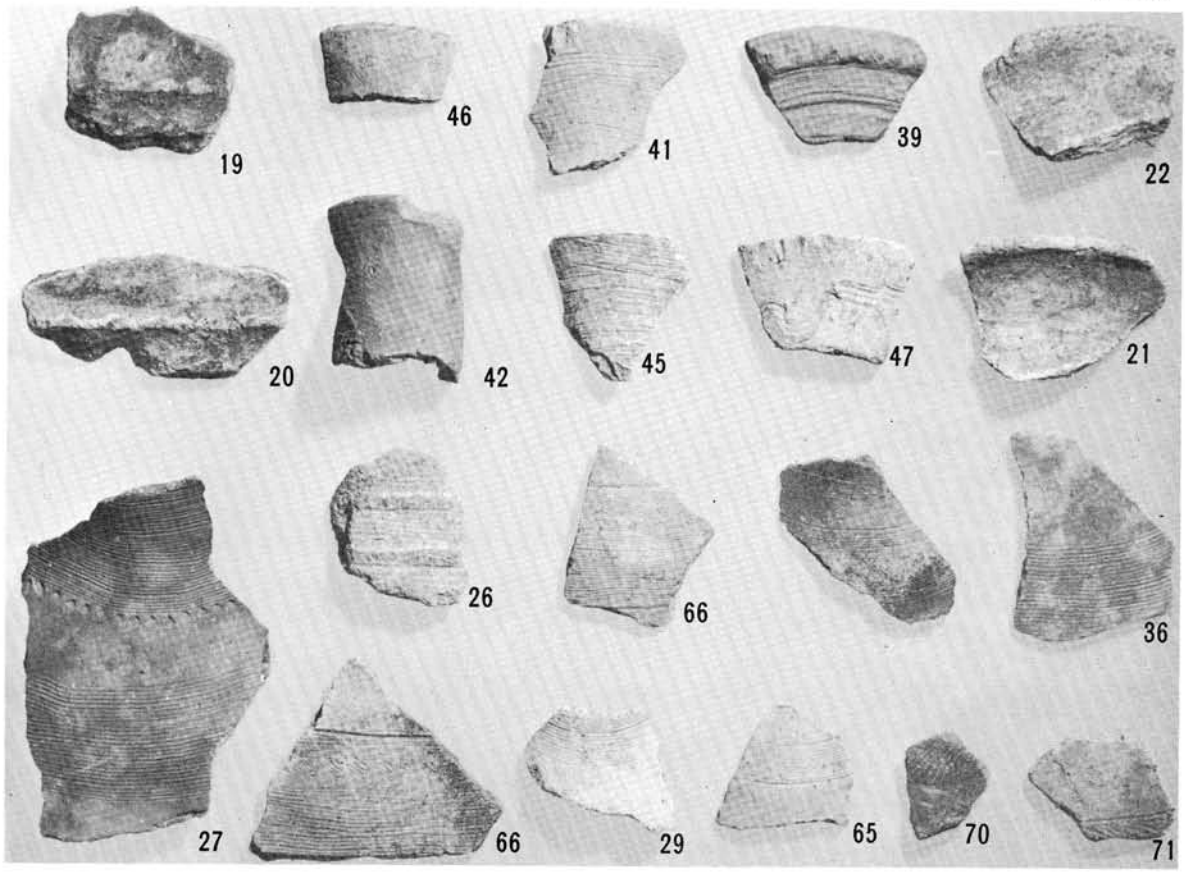
SB35・SB36・SB37（北から）

SB39・SD40・SB35・SB36・SB37（北西から）

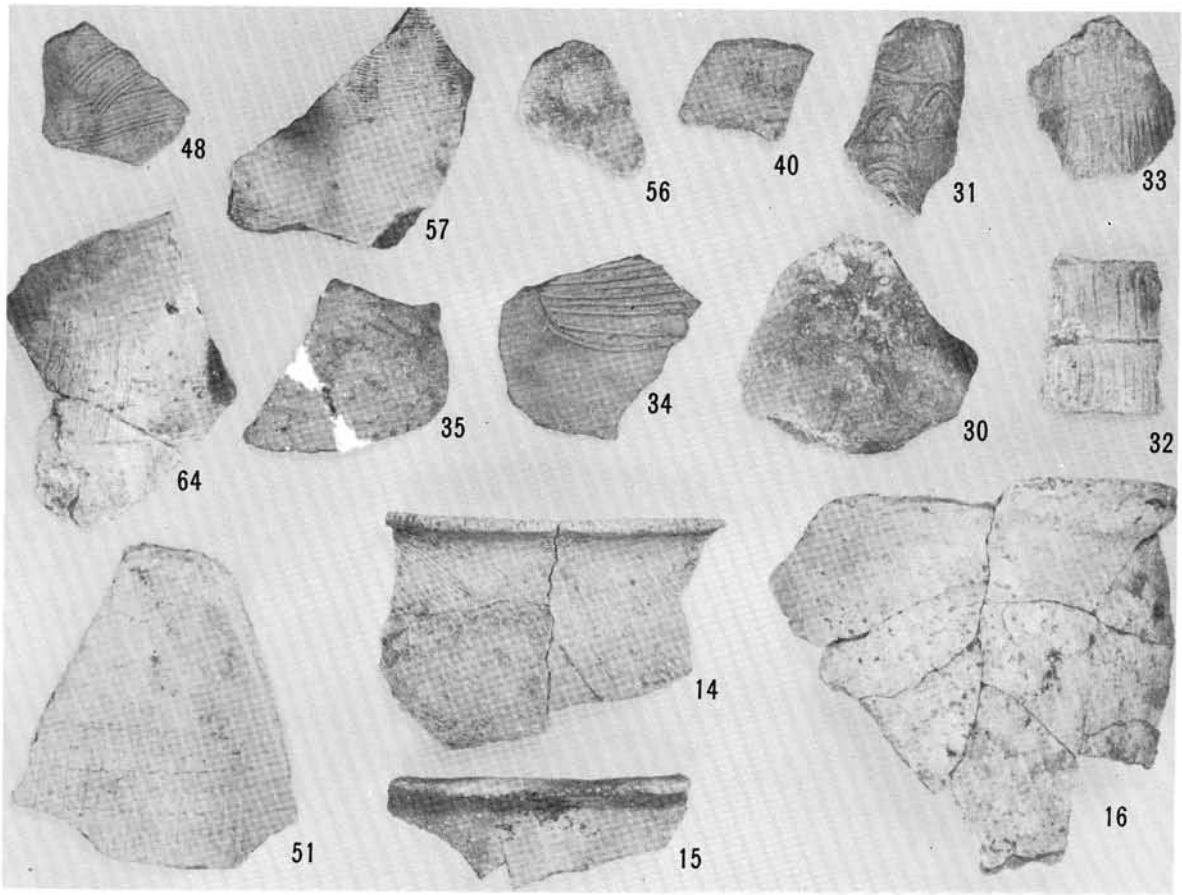


SB41（北から）

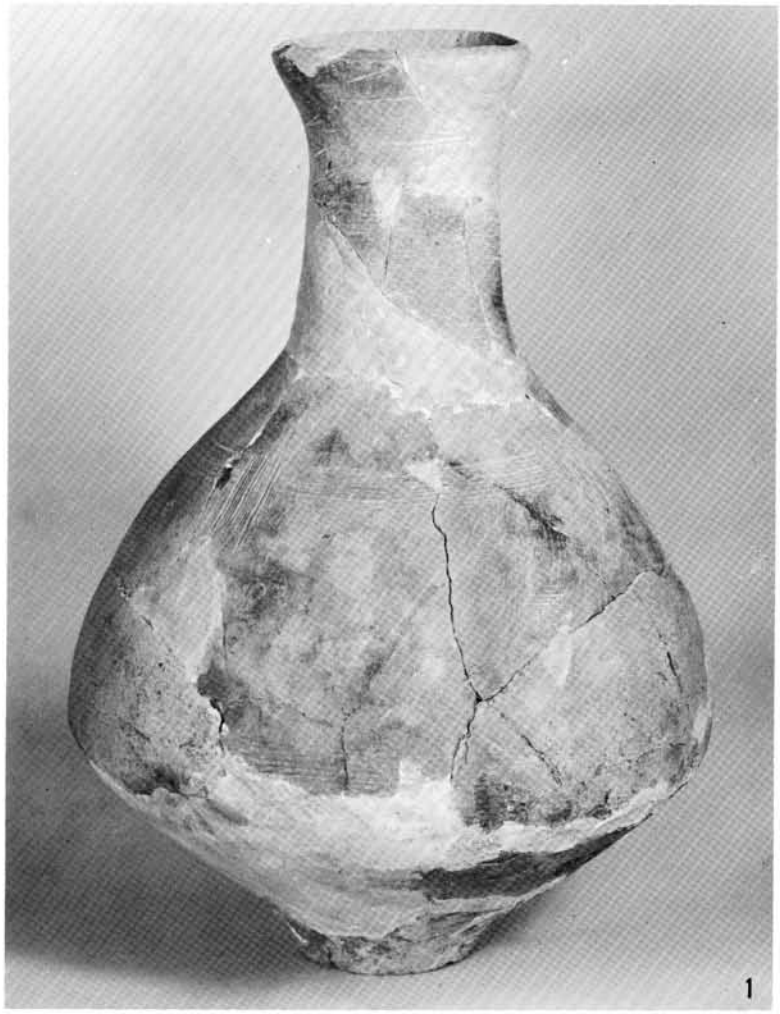
SB57・SX58・SD50（東から）

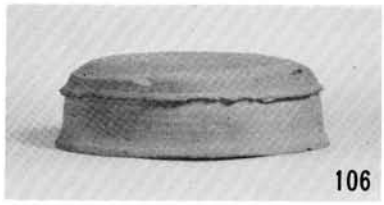


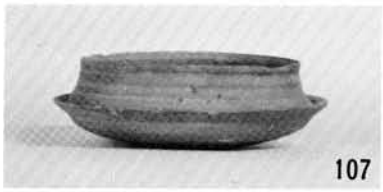
弥生時代土器（1：3）

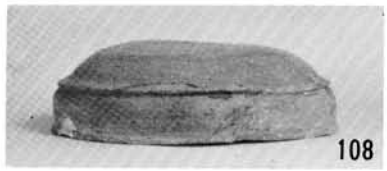


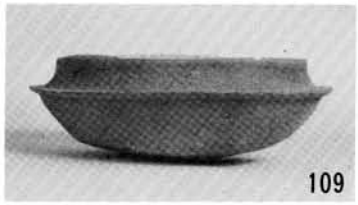
弥生時代土器（1：3）

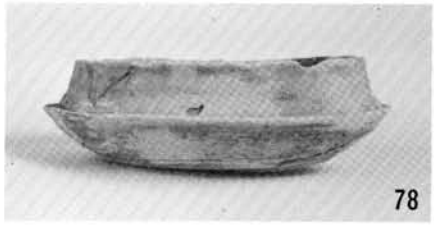




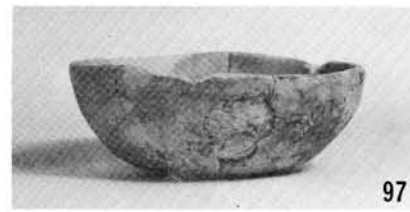


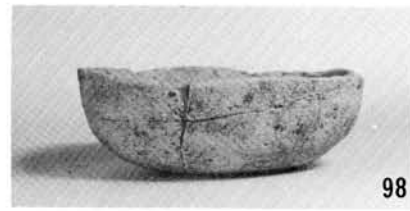


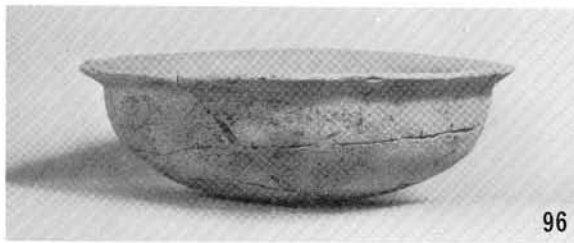


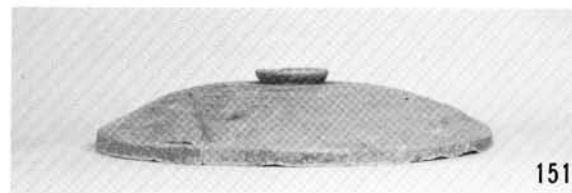


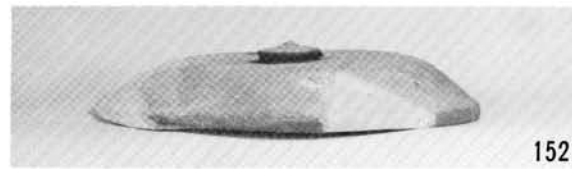
弥生時代土器（1）・古墳時代土器（1：3）

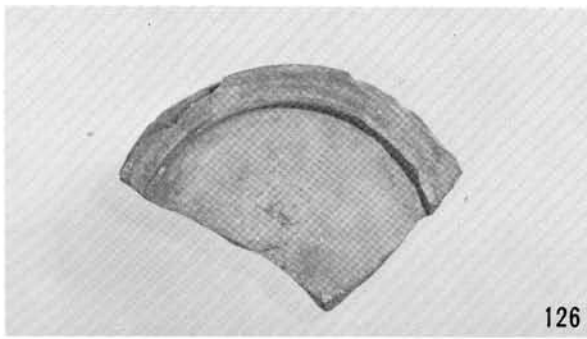




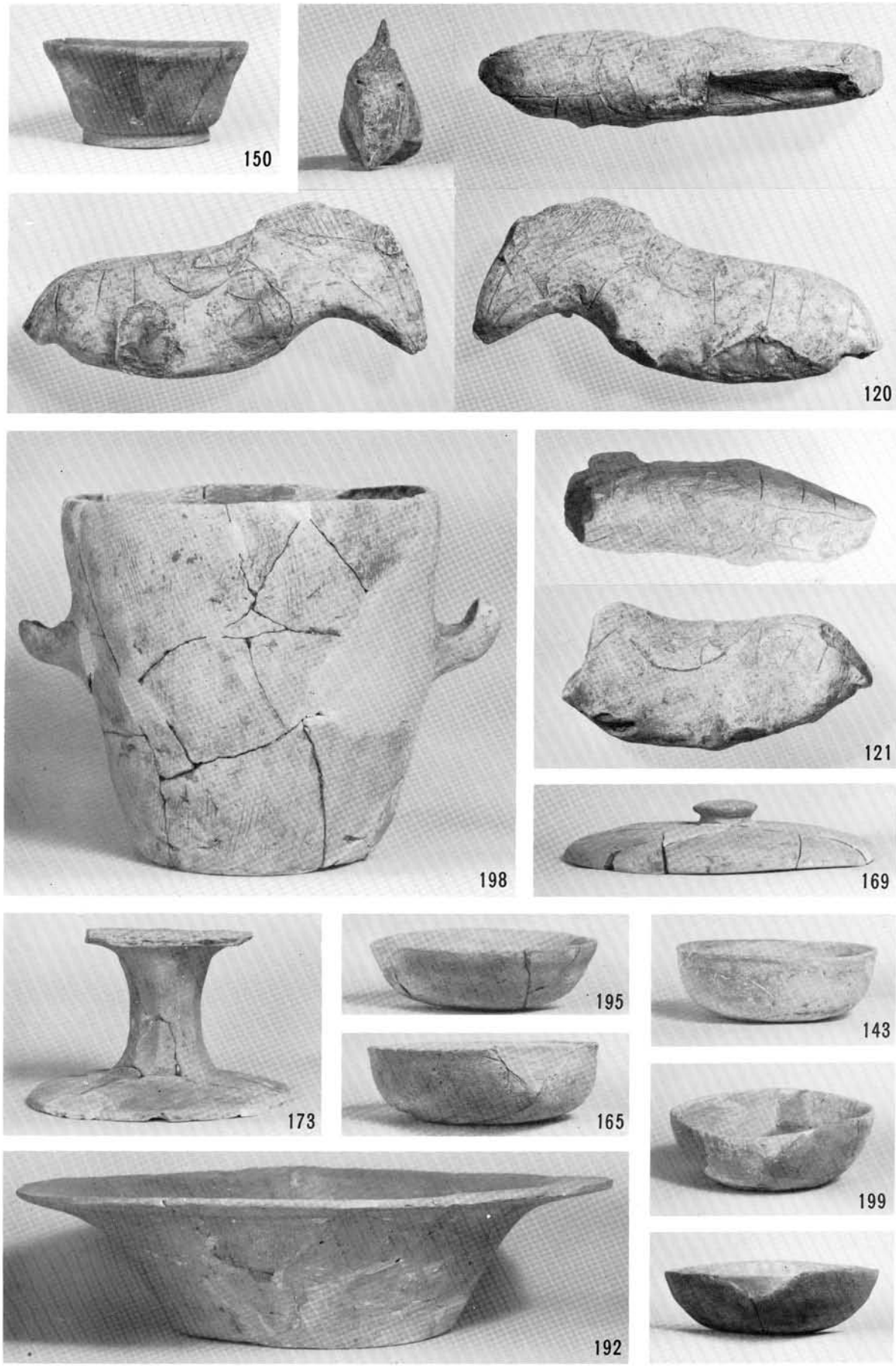




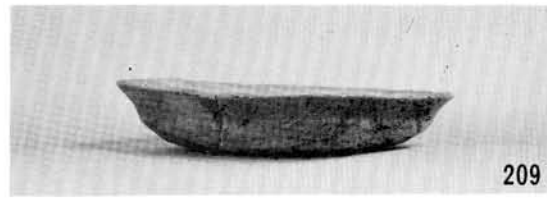


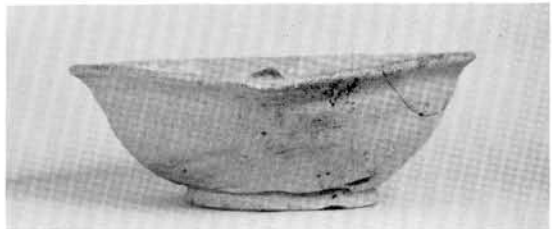


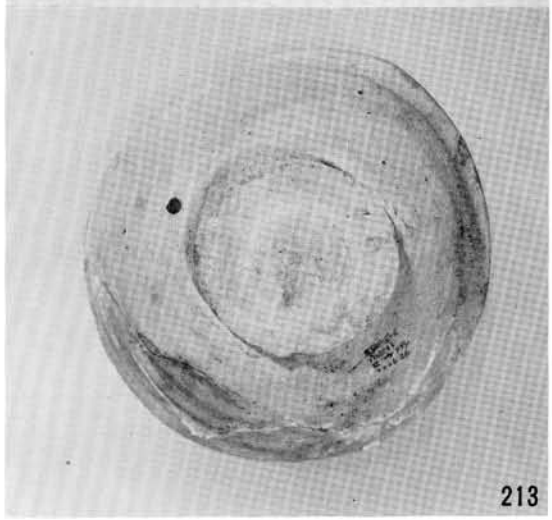
古墳時代土器（上段）、飛鳥奈良時代（下段）（1：3）

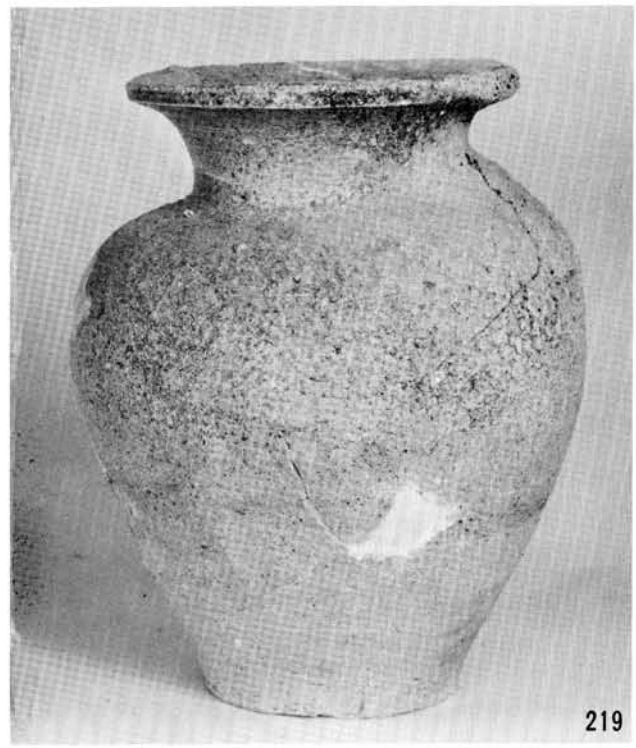


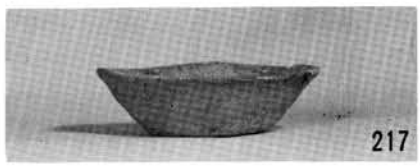
飛鳥奈良時代遺物（1：3）

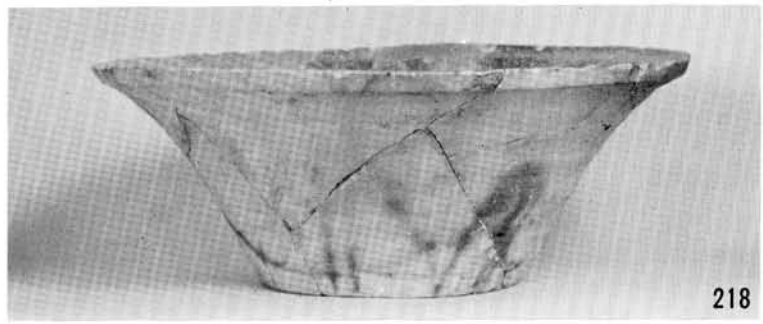




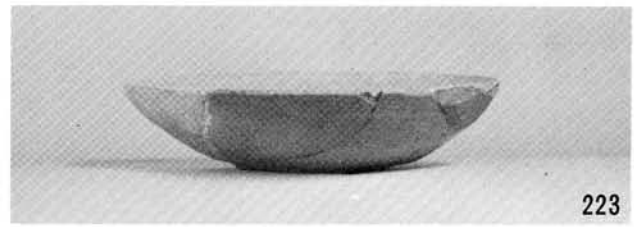


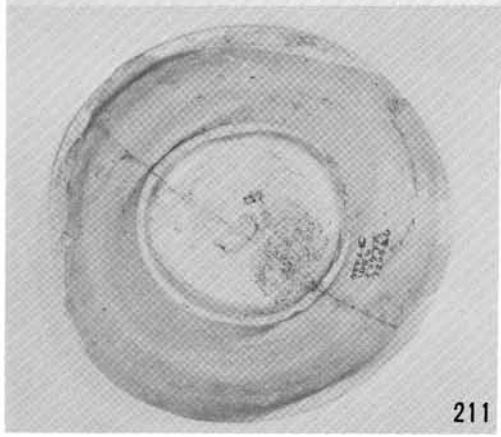


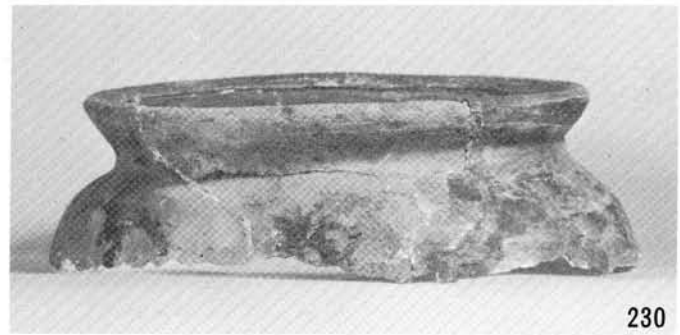




飛鳥奈良時代土器（上段）・平安時代土器（中右）・鎌倉時代土器（下段）（1：3）





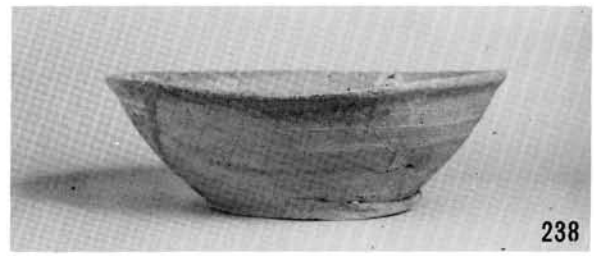


鎌倉時代土器（1：3）

231

237

233


238

251

250

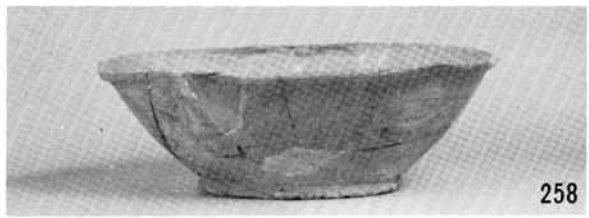
236

259

260

275

鎌倉時代土器（1：3）


258

261

264

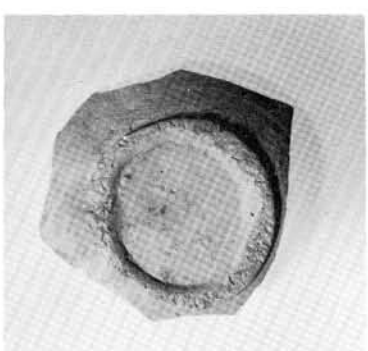
265

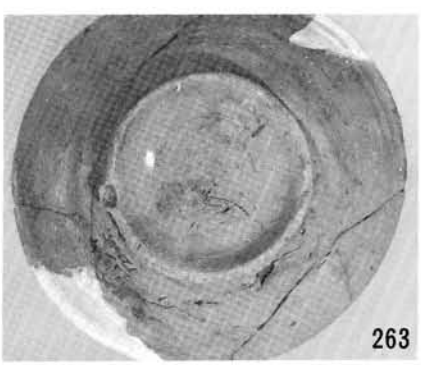
268

270

269

271




263

276

鎌倉時代土器（1：3）

昭和48（1973）年３月に刊行されたものをもとに
平成16（2004）年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財報告17

古里遺跡発掘調査報告

1973年３月31日

編　集
発　行　　三重県教育委員会

印　刷　　津市栄町二丁目
東亜印刷有限会社